

高知県南国市

# 西見当遺跡発掘調査報告書

田村西見当農道改良工事に伴う発掘調査

1983. 3.

南国市教育委員会



SDI 出土の石刀

## 序

高知平野の中心地にある田村遺跡はかつて銅鐸や銅鏡が発見されており、出土した弥生前中期前半の多くの土器の中には底部に粉痕の残っているものがあり、広い範囲に亘って弥生期の包含層をもつ土佐における縄作発祥の地であります。

この遺跡は昭和30年、昭和38年、昭和51年と発掘調査が行われてきましたが、昭和49年に「銅鐸の舌」が発見され「田村西見当遺跡」として全国的な遺跡となりました。

しかしこの付近は昭和54年度より高知空港拡張整備事業が行われておらず、昭和56年度から空港周辺整備事業として農道改良工事が実施されることとなりました。

そのため「田村西見当遺跡」の緊急発掘調査の必要にせまられ、高知女子大教授岡本健児氏、県文化振興課宅間一之社会教育主事、出原恵三主事のご指導を得て、昭和56年11月24日から昭和57年1月9日まで発掘調査を行いました。

その結果、出土品として弥生土器片約8,000点、石刀、石包丁等の石器及び、数多くの遺構が発見されました。こうした貴重な遺構は現地保存の困難性から、出土品とともに記録として保存し、次代に継承してゆく資料として活用されることを念じます。

終りにのぞみこの報告書作成にいたるまで特にご繁忙の中をご教示、ご盡力いただきました岡本健児教授、宅間一之社会教育主事、出原恵三主事並びに高知県文化振興課南国調査連絡所の皆様、この発掘にご協力くださいました関係者の方々に厚くお礼を申しあげます。

昭和58年3月1日

南国市教育長 門 田 真 一

## 例　　言

1. 本書は、高知県南国市田村西見当21号道改良工事に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の指導協力をうけて実施した。
3. 調査は下記の調査団が中心となって実施した。

團　長	門　田　真　一	南国市教育委員会教育長
副團長	唐　岩　白　龍	南国市企画財政課長
	国　松　栄　榮	南国市教育委員会教育次長
	岡　崎　俊　一	南国市教育委員会社会教育課長
調査指導	岡　本　健　児	高知女子大学教授
	宅　間　一　之	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
總　務	坂　本　延　男	南国市企画財政課空港担当主監
	大　川　一　水	南国市企画財政課空港運輸係長
	竹　田　亮	南国市教育委員会社会教育課係長
	浜　田　美　智　子	"　　主事
	武　田　勝	"
	久　家　豊　一	"
調　査　員	出　原　恵　三	高知県教育委員会文化振興課主事
	下　村　公　彦	"
	角　谷　和　男	"
	森　田　尚　宏	"
	井　本　葉　子	"
	廣　田　佳　久	"
測　量	藤　田　威　志	南国市都市計画課技師

4. 本書の執筆は岡本健児、宅間一之氏の指導をうけて第1章は浜田美智子が、第2章～第5章は出原恵三が担当した。
5. 遺物の整理は出原恵三、浜田美智子があたり、実測は出原恵三、中城富規、畠中史子、福井郁美、井本葉子が行った。
6. 図版に示す番号は挿図番号一実測図番号である。
7. 発掘調査にあたっては、高知大学学生、地元作業員の方々の御協力を得、また本書を成すにあたっては、多くの方々の御指導と御協力をいただいた。ここに深甚の謝意を表すものである。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第2章 西見当遺跡の概要 .....	3
1. 地理的環境 .....	3
2. 西見当遺跡及び周辺の歴史的環境 .....	3
第3章 調査区の概要と検出遺構 .....	6
1. A地区の調査 .....	6
2. D地区の調査 .....	9
第4章 出土遺物 .....	10
I 土器 .....	10
(1) SK 1出土の土器 .....	10
(2) SK 2出土の土器 .....	14
(3) SD 1出土の土器 .....	14
(4) SD 2出土の土器 .....	16
(5) ピット出土の土器 .....	16
(6) A・B地区包含層(耕作土, 床土)出土の土器 .....	17
(7) A地区搅乱層出土の土器 .....	17
(8) D地区遺物包含層の土器 .....	19
II 石器 .....	24
III 出土遺物についての考察 .....	27
第5章 まとめ .....	31

## 挿 図 目 次

1. SK 1出土土器実測図
2. "
3. "
4. SK 2, SD 1, SD 2, 包含層 P 1出土土器実測図
5. SD 1出土土器実測図
6. "
7. SD 1, SD 2出土土器実測図
8. A・B地区包含層, 搾乱層出土土器実測図
9. A地区搾乱層出土土器実測図
10. A地区搾乱層, D地区出土土器実測図
11. D地区出土土器実測図
12. "
13. "
14. "
15. "
16. "
17. D地区出土土器実測図, A・D地区出土土器拓本
18. 石器実測図 1
19. " 2
20. " 3
21. " 4
22. " 5
23. " 6
24. " 7
25. " 8
26. " 9
27. " 10

## 図 版 目 次

1. A地区全景南から, A・B地区西から
2. D地区全景南から, A地区遺構完掘状況
3. A地区SK2及びSD2東から, A地区SK2及びSD2西から
4. A地区SD1西から, SD1土器出土状況
5. SK1土器出土状況, "
6. SD1床面石刀出土状況, D地区石庖丁出土状況
7. SK1出土の変形土器, D地区出土の変形土器
8. A・D地区出土遺物
9. A地区出土の土器
10. A地区SK1出土の変形土器
11. A地区包層及び搅乱層出土の土器, SD1出土の変形土器
12. D地区出土の壺・変形土器, A地区SD1出土の壺形土器
13. D地区出土の鉢形土器・変形土器, A地区搅乱層出土の土器
14. D地区出土の変形土器
15. D地区出土の壺形土器口縁部
16. D地区出土の変形土器
17. A・D地区出土の壺形土器胴部破片, D地区出土の変形土器
18. A地区SD2出土の変形土器, SD1及びD地区出土の石斧
19. A・D地区出土の石縁・石庖丁
20. A・D地区出土の打製石斧・叩石

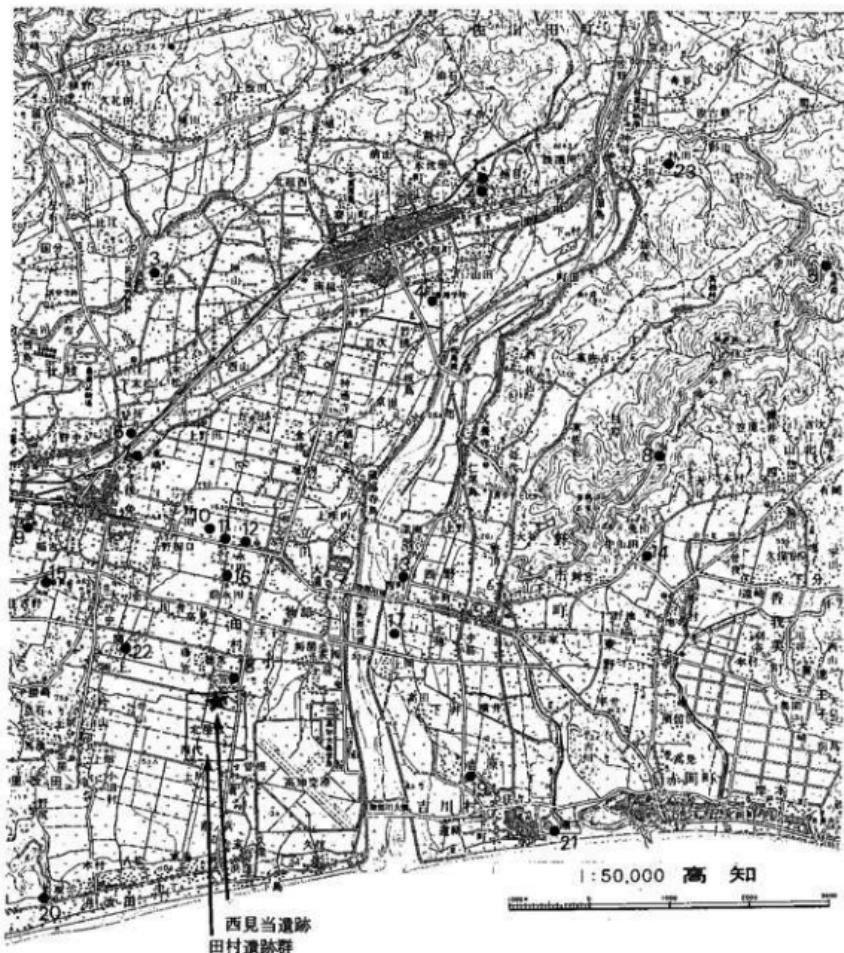
## 第1章 調査の経緯と経過

西見当遺跡は 1955 年の発見以来、南四国中央部における弥生文化発祥の地として知られてきた。1974 年には銅鐸の舌の発見とそれに続く発掘調査により弥生前期前半にさかのぼる重要な遺跡として高い評価を受けるところとなった。

しかしながら、ここ数年本遺跡の位置する田村地区全域において、高知空港拡張工事に伴う周辺整備事業が進められるようになった。1981 年度には、整備事業の一環として西見当地区的農道改良工事が計画された。このため南国市教育委員会は、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとした。調査の方法等については、高知女子大学岡本健児教授、高知県教育委員会文化振興課宅間一之社会教育主事の指導をうけた。81年11月に調査団を結成し、高知県教育委員会、工事担当関係機関の全面的な協力を得て11月24日発掘調査を開始した。

調査は発掘区周辺の地権者や、地元作業員の方々の暖かい御理解と御協力によって円滑にすすめられ、最終的に調査面積は 450 m<sup>2</sup> となった。12月21日には現地説明会を開き、25日に調査の全日程を終了した。

なお、重要遺構の検出された区域については、当初計画された工法を変更し、遺構保存を目的としたうめ戻しの工法を採用したことも付記しておきたい。



西見当遺跡  
田村遺跡群

1 競野中学校々庭遺跡（後）	9 大蔵 遺跡（前）	17 北地 遺跡（後）
2 ヒビノキ 遺跡（後）	10 妻中内 遺跡（後）	18 正善銅鐸出土地（後）
3 三島 遺跡（中・後）	11 平杭 遺跡（後）	19 野口 遺跡（後）
4 原 遺跡（後）	12 大北 遺跡（後）	20 トリアサリ遺跡（前・中）
5 竜河洞 遺跡（中・後）	13 深洞 遺跡（中）	21 住吉 遺跡（後）
6 東崎 遺跡（後）	14 東曾我 遺跡（後）	22 開銅鐸出土地（中）
7 農業高校々庭遺跡（後）	15 吾岡山 遺跡（中）	23 林田・カリヤ 遺跡（後）
8 笹ヶ峰 遺跡（中・後）	16 上細工瀬 遺跡（後）	

第1図 周辺の弥生時代遺跡

## 第2章 西見当遺跡の概要

### (1) 地理的環境

西見当遺跡は、南国市田村字西見当に所在する。この地は南四国最大の穀倉地帯である香長平野の東南部に位置したのどかな田園地帯である。

香長平野の大部分は、当遺跡より東方 1.6 キロメートルを流れる物部川によって形成された本県最大の扇状地である。洪積世終氷期頃に北方の長岡台地及び物部川東岸の野市台地に代表される古期扇状地が形成され、次いで二つの古期扇状地に挟まれるような形で新期扇状地が形成されている。香長平野の大部分はこの新期扇状地によって形成されている。また物部川の流路が今日のように固定したのは、近世の堤防強化工事以後のことであり、それ以前は当地より北方約 4 キロメートルの土佐山田町岩瀬あたりが、自然の吐流口となり、扇状地を放射状に派流していた。従って西見当遺跡等が存在する下流域においては、幾つもの自然堤防や後背湿地が形成されていたものと考えられる。西見当遺跡もこれらの自然堤防上の一つに立地する。現在遺跡付近の地形は大きな起伏は見られないが、近世以前はかなりの起伏があったものと考えられる。  
(1)

### (2) 西見当遺跡及びその周辺の歴史的環境

西見当遺跡は1955年浜田春水氏によって発見された。その後高知県教育委員会、南国市教育委員会は2次にわたって調査を実施した。

第1次調査は、1955年高知女子大学岡本健児教授によって旧A地区(2図)が行われ、184cm×145cm、深さ55cmの橢円形貯蔵穴1基と、東西にのびる幅130cm、深さ78cmの溝状遺構が確認された。またこれらの遺構に伴って多量の弥生前期土器や石器類も出土した。出土した土器について岡本氏は、  
(2)  
達賀川式土器としながらも、入田I式土器より新しく、大陸式土器<sup>(3)</sup>よりは古いものとし、西見当式土器として弥生前期後半に編年した。  
(5,6)  
これによって南四国中央部での弥生文化のはじまりを前期後半にまでさかのぼらせることが可能にした。

第2次調査は、1976年2月岡本健児、廣田典夫両氏によって、旧B、旧C区(2図)が行われた。この調査で確認された遺構は、小工房址と3基の貯蔵穴及び断面V字形の環濠の一部であった。出土<sup>(7)</sup>遺物は弥生前期各種土器類及び各種の石器類が多量に出土した。

土器については、西見当式土器と、これに先行する土器の出土をみ、連続する二型式の土器を、遺構・層位別に確認した。この結果岡本氏は従来の西見当式土器を西見当Ⅰ式土器とし、新発見の土器を西見当Ⅱ式土器として型式設定した。このことによって南四国の前期弥生土器編年は、入田I式→西見当Ⅰ式→西見当Ⅱ式→大槻式と四期に細分された。

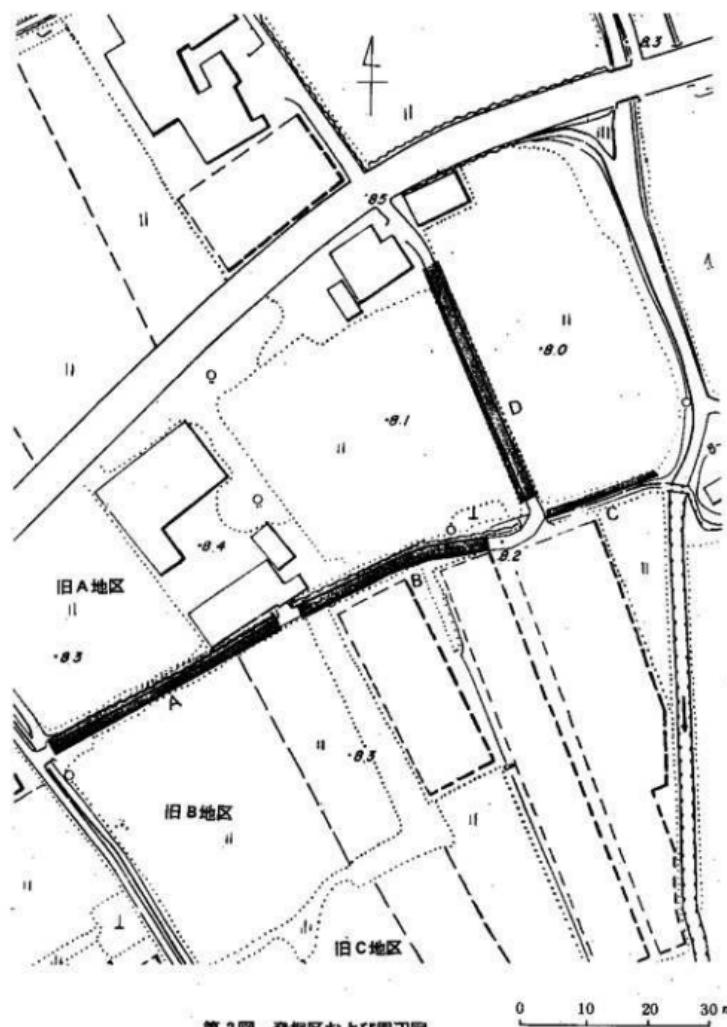
またこの調査は土器編年の進展ばかりでなく、大陸系の磨製石器が最初の段階から共伴すること、それと共に繩文的打製石斧が相当量出土すること、そして扁平叩石が多量に出土することなど南四国における弥生文化成立期の特徴を明確にすることができた。

二次にわたる調査によって、南四国中央部における弥生文化が前期前半にさかのぼることや、環濠をもつ集落遺跡であることの確認はできたが、調査地点が一体集落のどの部分にあたるか、また住居地の存在地点などが不明であることなどの問題を残した。

この西見当遺跡を含む田村遺跡群は、弥生前期前半から後期中頃まで連続し発展する。しかし後期末になると集落の中心地は北方に移動し、長岡台地、土佐山田町方面にその展開をみせる。田村遺跡群の弥生中期から後期にかけての弥生文化の展開には興味をひくものがある。中期以降田村遺跡を中心として、その東と西では土器の様相が大きく異ってくる。東の土器は畿内の・東瀬戸内的な特徴を有するのに対して、西の土器は極めてローカル色の濃厚なものとなる。この田村遺跡群においては、両者が出土する。この現象は土器のみならず青銅器においても同様である。後期になると田村遺跡群も含めて東では銅鐸（Ⅲ・Ⅳ）が出土し、またこの地も含めて西では銅矛（広形Ⅰ・Ⅱ）が出土するなど「文化」の様相が二分され、この地は両者の接点的位置にある。このことについて岡本氏は「<sup>(9)</sup>弥生後期初頭では、南国市を含むそれ以西の地域土佐山田町以東の地域で、大きな対立抗争があった」とし、佐原真氏は「瀬戸内沿岸地方の掌握ないし進出を断念した北九州弥生文化が、四国太平洋沿岸に手を伸ばした可能性、そしてそれに対抗して畿内式銅鐸を高知県東部にひろめた可能性を想像させる」としている。

#### 註

- (1) 岡本健児 「弥生前期時代」『南国市史』 1979年
  - (2) 岡本健児 「高知県長岡郡西見当遺跡調査報告」「高知県文化財調査報告書」等8集 1955年
  - (3) 岡本健児 「土佐入田遺跡調査概報」「考古学雑誌』38-5・6 1952年
  - (4) 岡本健児 「高知県長岡郡大篠遺跡」「日本考古学年報』 3 1956年
  - (5) (1)に同じ
  - (6) 岡本健児 「土佐の原始と古代文化」 1959年
  - (7) 「高知県田村西見当遺跡（B・C区）の発掘」 南国市教育委員会 1976年
  - (8) (1)に同じ
  - (9) (1)に同じ
- ⑩ 佐原 真 「銅鐸と武器形青銅祭器」「三世紀の考古学」中巻 1981年



第2図 発掘区および周辺図

### 第3章 調査区の概要と検出遺構

西見当遺跡の調査範囲は、21号道路拡張区全域をその対象とした。西からA地区、B地区、C地区、D地区を設定した。調査方法としては、まず現在の道を崩さずに道路を挟んで両脇にトレンチを入れ、遺物包含層及び遺構が確認された所については道路を崩し発掘を実施した。その結果A地区に遺構が集中し、B・C地区では遺構、包含層とともに存在せず、D地区では耕作土と床土をのぞくとほぼ全面に遺物包含層が広がっていた。従って、A・D地区においては、全面発掘し、B・C地区においてはトレンチ調査のみで調査を終了した。

#### 1. A 地区の調査（3図）

旧A・旧B地区の中間に位置し、西端において田村川に接する。農道を挟んで北側は新しく作られた溝の為に地表下70~80cmまで擾乱を受けている。このトレンチの西端の泥土中より弥生前期の土器片が数多く出土したが、田村川よりの漏水と泥土の為に遺構を検出することはできなかった。しかしながらこれら土器片の集中散乱は、SD1・SD2との関係が大であるものと考えられる。A区南側の遺構検出面の高さから考えて、農道北側の遺構は完全に破壊されているものと思われる。

農道を挟んで南側は、最初路肩を崩さずに水田北辺より幅90cmのトレンチを東西に入れた。耕作土と床土を取り除くと黄褐色シルトの地山層がありその層位が遺構検出面である。地表下約20cm内外の深さで遺構検出面に達する。トレンチの東西のほぼ中央部において、トレンチを南北に横切り農道の下にほぼ直角に潜り込む遺構を検出した。さらにこの遺構に一端が交わり、西北西に伸び農道下に斜めに潜り込む溝状遺構を検出した。前者をSK1、後者をSD1とする。次にトレンチ西端部において溝状遺構及びそれと切り合う土壤を検出した。前者をSD2、後者をSK2とする。

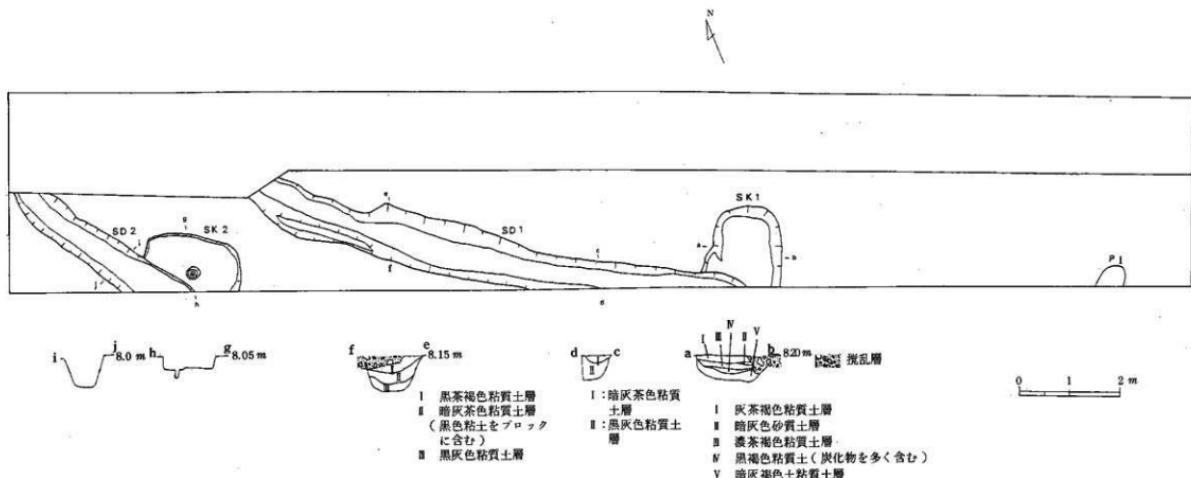
##### SK1

現在最大幅156cm、長さ160cm、深さ52cmを測り、西南端をSD1に切られている。床面は舟底状をなし、埋土は1層~V層に分層することができ、各々レンズ状の堆積をなす。各層ともⅡ類土器が多量に出土した。Ⅲ層は多くの炭化物とチャートのフレークを含んでいる。最下層のV層においては、Ⅰ類土器（図1-28、34、2-8）が少量と、Ⅱ類の鉢形土器（図3-2）が床面にへばりついた状態で出土した。SD1に切られているのと、SK1の半分が調査区外にでている為にこの土壤の性格をはっきり掴むことは困難であるが、前述の鉢形土器の出土状態からして貯蔵穴と考えができる。なお、この土壤は前期後半に使用されて、同時期に廃棄されたものであろう。

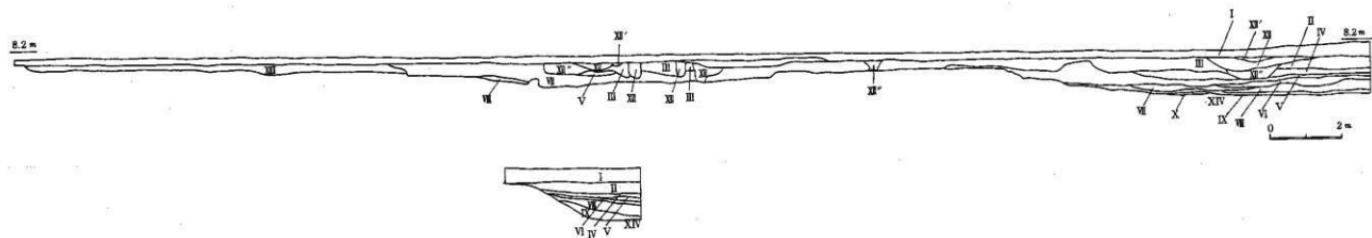
##### SK2

長辺2m、深さ24cmを測り、隅丸方形のプランをなす。土壤のほぼ中央部に直径20cm深さ15cmの柱穴をもつ。一端をSD2に切られている。中央の柱穴は土壤を覆う屋根を支える柱のものと考えられる。出土遺物はⅡ類の壺形土器及び變形土器である。SK1とほぼ同時期の貯蔵穴と考えられる。

##### SD1



第3図 A区達根実測図



南端盤

第4図 D区トレント東壁

I	耕作土	X	灰茶色粘質土層
II	赤黒褐色粘質土層	X	暗黄灰色砂質土層
III	茶褐色粘質土層	X	淡灰黃色粘質土層
IV	茶灰色砂質土層	X	擾乱層
V	明黄色粘質土層	X'	"
VI	黄茶褐色粘質土層	X"	"
VII	黄茶灰色粘質土～砂質土層	XII	淡茶褐色粘質土層
VIII	黄茶灰色粘質土層	XIV	茶灰色砂礫層

東端においてSK1を切り東南東より西北西に走り攢乱層に突っ込んでいる。最大幅1.1m、長さ9.6m、深さ68cmで断面はU字状をなす。溝の両側の壁は平行線を保たず、広くなったりせまくなったりしている。これは溝構築にあたって、おそらく東から西に向かって掘ったものではなかろうか。埋土はⅠ～Ⅲ層に分層可能で各層よりⅡ類土器が多量に出土した。特にⅡ層上面にはあたかも土器を並べ置いたような出土状態であった。床面において石刀(図19-44)と柱状片刃石斧(図20-27)が出土した。前期後半に使用されたものと考えられる。

#### SD2

トレンチの西端を斜めに走りSK2を切っている。最大幅0.8m、長さ3.2m、深さ0.6mを測る。埋土はⅠ層である。Ⅱ類、Ⅲ類の変形土器が出土したが、他の遺構に比較して出土遺物が少ない。前期後半に廃棄されたものである。

#### P1

トレンチの東端に位置する。遺構の半分は調査区外にでているが、梢円形のプランを呈するものであろう。幅40cm、深さ5cmを測る。Ⅰ類の土器が少量出土した。

## 2. D地区の調査(4図)

幅3.8m、長さ38mの調査区である。耕作土を除くとほぼ全域に弥生前期・中期の遺物包含層が広がっている。南北に長い調査区の西側約3分の1は、A地区と同様に耕作土を除くと地山層に達するが、東側は遺物包含層となり次第に深くなっている。また南へいくに従ってその深さを増し、南端では深さ2.2mを測る。包含層の下は砂礫層となっており旧地形が東南に向かって下降していたことを示す。包含層よりは多量の弥生前期土器・石器と少量の中・後期の遺物が出土した。

以上A・D地区の遺構・遺物包含層について述べた。まずA地区において検出した遺構の新旧関係については遺構の切り合い、出土遺物などからSK1→SD1、SK2→SD2、SD1→SD2となるであろう。SK1とSK2との時間的な関係は、出土遺物からSK1の方が古い要素をもつていて、また第2次調査において、西見当Ⅰ式土器の伴う貯蔵穴は柱穴を持たず、西見当Ⅱ式土器の伴う貯蔵穴は柱穴を持つという結果がでている。<sup>10</sup> SK1は前期後半でもやや古い時期とできる。従ってA地区において確認された遺構の新旧関係は、SK1→SD1=SK2→SD2とすることができよう。

D地区の包含層の下で確認した砂礫層は、第2次調査の時に旧C地区で確認された「環濠東部に広がる氾濫原に続く可能性がある。また地山層が東南方向に向かって下降する」という旧地形の一部復元<sup>11</sup>によって、D地区あたりが自然堤防の東南端に位置する可能性が考えられる。

#### 註

10) 岡本健児 「弥生前期時代」『南国市史』1979年

11) "

## 第4章 出土遺物

### I 土器

今回の調査で出土した土器は完形品がほとんどなく口縁部、胴部、底部等の破片ばかりであるため十分な器形分類が不可能であった。壺形土器、鉢形土器、甕形土器を主に口頸部の形態、成形手法、施文等によってⅠ類～Ⅲ類に分類し、それぞれの器形ごとに器形分類を行った。

#### Ⅰ類

壺形土器ⅠA 口頸間にしっかりした段部を有するもの。

壺形土器ⅠB 口頸間に段部を有する大型壺形土器

甕形土器ⅠA 如意形口縁を有し口唇部には刻目を施す。頸部にしっかりした段をもち、段部は刻目か刺突文を有するもの。

#### Ⅱ類

壺形土器ⅡA 口頸間に段部を有するがⅠAに比較すると弱く、ヘラによって際どりあるいはヘラで押しナデることによって段部をつくり出しているもの。

〃 ⅡB 口頸間に段部を持たず頸区分文様としてヘラ描沈線を入れるもの。

〃 ⅡC 削り出し突唇を有するもの。

〃 ⅡD 貼付突唇を有するもの。

〃 ⅡE 大型壺形土器

鉢形土器ⅡA ヘラ磨き調整によるもの。

〃 ⅡB ハケ調整によるもの。

甕形土器ⅡA 如意形口縁を有し口唇部に刻目を施す。頸部に段部をもつがⅠAに比較すると弱く壺形土器ⅠAの段部と同じ手法によるものである。また段部にはⅠAのような刻目や刺突文は施さない。

〃 ⅡB-1 如意形口縁部を有し頸部に段を持たないもので、頸部に1～3条のヘラ描き沈線を施すものもある。また沈線間に列点文・刺突文を有するものもある。

〃 ⅡB-2 口縁部の形態はⅡB-1と同様であり、頸部には段を持たない。頸部の沈線がヘラで施されるのではなく、半截竹管等による双線である。

〃 ⅡC 口縁部が直角に屈曲するものである。如意形口縁の成形と同じ手法を用いているので逆L字状口縁とは区別される。頸部に段を有するものと持たないものがある。段を有するものにはⅠAの上のような刻目、刺突文は施さない。

#### Ⅲ類

壺形土器ⅢA ⅠA・ⅡAに比べて口縁部が著しく発達する。口頸間に弱い段を有し、その手法はⅠAと同様である。

〃 ⅢB 頸部に数条のヘラ描沈線を帯状にめぐらすものである。

壺形土器ⅢC 頸部に全く施文の見られないものである。

- 〃 ⅢD-1 断面長方形の太い貼り付け突帯を有するものである。
- 〃 ⅢD-2 幅広の扁平な貼り付け突帯を有するものである。
- 〃 ⅢD-3 断面三角形の貼り付け突帯を有するもの。
- 〃 ⅢE 异生土器一般の胎土と全く異なる色調・胎土を有するものである。すなわち异生土器一般の色調が淡褐色・褐色を呈するのに対してⅢE類は、黒褐色を呈する。更に器肉が極めて薄く、且つ極めて堅硬である。
- 〃 ⅢF 口縁部が非常に発達し内面に沈線の入るものである。

鉢形土器ⅢA 如意形口縁を有するものである。

- 〃 ⅢB 口縁部に断面三角形の太い粘土紐を接合したものである。

壺形土器ⅢA いわゆる逆L字状口縁を有するものである。直行する口縁端部に粘土紐を接合する点が、ⅢCと区別される。口縁部の形態によってさらに2つに分類することができる。通常数本のヘラ描き沈線を有す。

- 〃 ⅢA-1 口縁部上面が水平な面をなすものである。
- 〃 ⅢA-2 口縁部上面が水平な面をなさず外方に下垂するものである。
- 〃 ⅢB-1 如意形口縁を有し頸部に2条～10条のヘラ描き沈線を有し、沈線間の施文のないものである。口唇部に刻目のあるものとないものとがある。
- 〃 ⅢB-2 如意形口縁を有し口縁下に沈線のないもの。

#### (1) SK1出土の土器 (図1, 2, 3)

##### 壺形土器

壺形土器ⅠA (1-28) 最下層出土の土器である。口頸間にしっかりと段部を持つ。口唇部は面をなし、一条のヘラ描き沈線が走る。外面丁寧なヘラ磨きを施す。

壺形土器ⅡA (1-29) 直線的に外反する口縁部を持ち、口唇部は丸くおさめる。口頸間の段部は極めて弱くヘラで際取りをしてつくり出している。外面とも丁寧なヘラ磨きを施す。

壺形土器ⅡB (1-14, 33) ともに最下層出土の土器である。14の口縁部は強く外反し口唇部と口頸間に一条の細く浅い沈線が走る。外面縱方向のハケが下地にありその上を横方向にナデている。内面はヘラ磨きを施す。33は小型壺形土器である。口縁部は直線的に外反し、端部近くで強く折り曲げている。口頸間に2条の細いヘラ描き沈線、頸部には縱方向に3条のヘラ描き沈線が走り、複線山形文を有する土器である。外面ヘラ磨きを施す。

壺形土器ⅢD (1-9, 23, 35) 9は口頸間に扁平な台形状の貼り付け突帯をもつ。突帯には一条のヘラ描き沈線を入れ、沈線施文後に刻目を加える。口縁部外面は木理のやや荒いハケ原体による横方向のハケ調整をなし、口唇部及び口縁部内面はヘラ磨き調整を施す。

23は大きく外方へカーブする口縁部を持ち口唇部は面をなし横方向のナゲ調整を施す。口縁部外面には口縁部折り曲げの時にいた指頭圧痕が僅かに残る。口頸間には断面台形のしっかりと

した貼り付け突帯を有す。器面調整はヘラ磨きを施すが下地の縦方向のハケ目が僅かに観察できる。35は9の上胴部である可能性がある。外面はヘラ磨き調整を施し内面は器表の粘土が激しく剝離している。粘土帯接合部で破損しており接合部に貼り付け突帯を巡らしている。突帯の手法は9のそれと全く同じである。また内面の器表が大きく剝離し器内が露呈している部分より植物纖維の圧痕が4ヶ所観察できる。23は埋土1層、9、35は最下層出土のものである。

#### 壺形土器底部（図1）

平底のものとやや上げ底風のもとに区別することができる。

平底のもの（1-1, 38, 39, 47, 49, 50, 54）ほとんどのものが縦方向のハケ調整を行っている。1, 39, 49, 54はハケ調整後ヘラ磨きを行う。50はハケ調整後に底部と胴部の接合部に部分的に粘土を補充している。38は底部外面に黒斑がある。

上げ底風のもの（1-43, 44, 45）43は外面ヘラ磨き、44はハケ調整後部分的にヘラ磨きを施す。45は50と同様にハケ調整後に底部側縁に粘土を補充して成形している。43の底部外面の大部分に黒斑がある。

#### 鉢形土器（図3）

鉢形土器ⅡA（2, 48）2は大型の鉢形土器である。如意形に外反する口縁部を有する。口唇部は横方向のナデ調整によって斜め上向きの面をなし、ナデが強くあたったところは口唇部下端がやや下垂する。体部外面ヘラ磨き調整をなすが、口縁部内面は下地に横方向の荒いハケ調整を観察することができる。外面のヘラ磨きは左一右下方向であり胴部中位より下ではヘラの角度が変わる。また頸部直下は横方向のナデによってヘラ磨きが消えている。48は平捏ねの土器であり体部内外面に指頭圧痕が残る。

#### 壺形土器（図1, 2, 3）

##### 壺形土器ⅠA（1-34, 2-8）

34はしっかりした段部をもつ。段部は横方向の木堀の荒いハケ調整を施す。口縁部外面横方向のナデ調整をなし、内面は横方向のハケ調整の後ナデ調整を施している。口唇部は斜め上向きの面をなし刻目は下端にしっかりと施す。段部の刻目は断面三角形の原体で強く施している。8口縁部内外面ハケ調整の後横方向のナデ調整をなす。頸部内外面斜め方向のハケ調整、口唇部は横方向の強いナデにより斜め上向きの面をなし下端に刻目がつく。段部の刻目は口唇部のそれより太く短い。

壺形土器ⅡA（2-3, 10, 15, 32）刻目が口唇部全面につくもの（3, 10）と下半につくもの（15, 32）とがある。口唇部の形態は丸くおさめるもの（3）と垂直な面をなすもの（10, 32）とがあり後者は横方向のナデ調整による。32は口唇部に1条の沈線を巡らせ、その下に刻目を施している。15の口唇部は斜め上向きの面をなし、下半に深く強い刻目が入る。3は口縁

部内外面共に横方向のハケ調整をなす。段部下に黒斑が認められる。胴部外面に（右→左上）のハケ調整をなす。10は粘土帶の接合部を観察することができる。外傾を呈す。32は口唇頸部内外面横方向のナデ調整をなし、それによって稜をつくる。外面は横方向のナデ調整をなす。15は口頸部内面横方向のナデ調整、外面はハケ調整の下地の上をナデ調整する。15の段部はやや削り出し状をなすが、他の段部はヘラを押しあてることによって生じたものである。

變形土器ⅡB-1（1-7, 12, 17, 2-4, 6, 11, 16, 18, 20, 21, 30, 37, 3-31）20が刻目を持たない他はすべて口唇部に刻目を持つ。刻目の施し方は口唇部全面に施文するもの（4, 16）と下半、下端に施すもの（6, 7, 11, 12, 17, 18, 21, 30, 31, 37）がある。また口唇部の形態は垂直な面を有するもの（6）と斜め上向きの面をなすもの（4, 7, 11, 12, 16, 17, 18, 20, 21, 27, 30, 31, 37）とがある。

4は胴部外面に縦方向の荒いハケ目調整、口縁部内面は横方向のハケ目。胴部内面は斜め（右→左上）の板による調整痕が認められる。また屈曲部内面は横方向のハケ調整によって稜がつくる。なおこの土器はⅡ層とⅣ層とから破片が出土し、接合したものである。7頸部に2条のヘラ描き沈線を有し沈線間に列点文を施す。外面は縦方向のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整が僅かに観察できる。6は口径と腹径がほぼ等しい土器である。頸部に3条のヘラ描き沈線がめぐりその間に竹管文を有する。口唇部にも1条のヘラ描き沈線が走り沈線上り下に刻目がつく。Ⅱ層出土の土器である。12は2条のヘラ描き沈線が巡り沈線間に棒状工具による刺突文がつく。口縁部外面は横方向のナデ調整を施すが下地に縦方向のハケ目が残っている。胴部外面は縦方向、屈曲部内面は横方向のハケ調整をなす。口唇部は指ナデ調整により面をなす。最下層出土の土器である。27は2条のヘラ描き沈線が巡り沈線間に列点文を有する。口縁部内外面及び沈線下は横方向のナデ調整を施す。口唇部は横方向のナデ調整によって面をなしや下垂する。胴部外面は斜め方向（右→左上）のハケ調整をなす。16・17は頸部に1～2条のヘラ描き沈線が走り17の口縁部は頸部より直線的に伸びる。ともに口縁部内外面横方向のナデ調整を施す。18は器面に凹凸が残り一見叩目と誤認するようなハケ調整をなす。Ⅱ層出土の土器である。20は他のものに比べて胎土中の砂粒の混入度が少ない。口縁部内外面縦方向のハケ調整後横方向のナデ調整で仕上げている。鉢形土器の可能性がある。

變形土器ⅢB（3-19） 埋土1層より出土したものである。直線的に外反する口縁部を有し、口唇部は丸くおさめる。頸部に3条のヘラ描き沈線が走る。胴部外面には横方向のハケ調整を施す。

#### 變形土器底部（3-5, 40, 41, 42, 46, 52, 53, 55, 56）

ほとんどのものが体部外面に縦方向のハケ調整を施す。底部は平底であるが53のみ特異な作り方をしている。40の底部外面には植物織維の圧痕が残る。茅の上で成形したものと思う。40, 41, 42は底部外面の縁辺1～1.5cm幅の部分がススけている。使用法と関係があるのかもしれない。46は底部外面の一部に黒斑がある。

### (2) SK 2 (図4)

壺形土器ⅡB(4-1) 床面出土のものである。丸く外反する口縁部を有し、口唇部は面をなす。口縁部内外面及び頸胴部外面は全面へラ磨き、頸部下の粘土帯接合部に指頭圧痕が残る。口頸区分のヘラ描き沈線を有しないがⅡ類に入れた。

壺形土器ⅡE(4-6) 頸部よりなめらかに外反する口縁部を有し、口唇部は斜め上方の面をなす。粘土帯接合部を観察することができる。一粘土帯の幅は約5cmを測る。器表の荒れがひどく調整観察は不能である。

壺形土器底部(4-2, 3) ともに粘土充填の底部で、底部と胴部の接合部には内外面に粘土片を補って、指頭で押えつけている。2の底部外面及び下胴部内面には切圧痕が残る。器面はハケ調整の後、ヘラ磨きをかけている。3は内面に丹がこぼれ着いている。また底部の一部に黒斑が着く。

### 壺形土器

壺形土器ⅢB(4-5) なめらかに外反する口縁部を有し、口唇部は丸くおさめ端部はやや肥厚する。頸部には太いヘラ描き沈線を2条まで確認できる。

壺形土器底部(4-4) 脚付壺形土器底部と呼んだ方が相応するかも知れない。このような底部は1例のみである。底部内面には有機物が付着する。

他にSK2からは大形壺形土器の胴部破片が数片出土しているが図示し得なかった。胴口縁を観察するのに良好な資料である。

### (3) SD 1 (図5, 6, 7, 17)

#### 壺形土器

壺形土器ⅢE類(5-16) 大きく外反する口縁部を有する。口唇部は段をなし1条のヘラ描き沈線が走る。器面の荒れがひどく調整を十分に観察することはできないが、頸部外面は縱方向のやや荒いハケ調整をなし、その上を一部ヘラ磨きしている。頸部のヘラ描き沈線は細く山形に走る。

壺形土器ⅢD-3(7-35) 頸部がやや直線的に立ち上がり丸く外反する口縁部を有する。頸部に断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。突帯には刻目を施し斜めに3個ずつ施文し、その間には梢円形の刺突文が入る。

壺形土器胴部破片(6-25, 36, 38, 50, 5-56, 17-58, 60) 36は胴部に1条のヘラ描き沈線をめぐらす。頸胴区分の役割を果している。外面ヘラ磨き調整を施す。38は胴部に1条の細くて

浅い沈線と2条の太くて深い沈線を巡らす。外面は横方向のナデ調整をなす。50は削り出し突帯第Ⅱ種で、浅く削り出し削る範囲もせまいB種である。突帶には1条のヘラ描き沈線が走る。Ⅱ Cに属する全面ヘラ磨き調整を施す。56は胴部に2条のヘラ描き沈線を有し内面は成形の際に生じた段が僅かに認められる。58は胴部に1条のヘラ描き沈線があり沈線下が文様帶となり、ヘラ描きによる斜格子文を有する。全面ヘラ磨き調整を施す。25は小型壺形土器の胴底部である。外面全面にヘラ磨き調整を行う。60は2条のヘラ描き沈線が走り更に斜めに羽状文状に沈線が入る。38は埋土Ⅰ層、25、36、58はⅡ層、50、60は床面より出土した。38がⅢ類に属する可能性があるが他はすべてⅡ類に属する。

#### 壺形土器底部 (6-1, 2, 5, 6, 21, 24, 26, 33, 34, 37, 39, 45, 57)

上底風のもの (37, 39, 57) で他はすべて平底である。器表の荒れがひどく調整を十分に観察できないが、1はナデ調整、24はヘラ磨き調整を施す。24は外面全面に丹塗を施す。57は底部外面に物痕が、26は植物繊維の圧痕がつく。また底部外面には胴部との接合の際につけられた指頭圧痕が残るものが多い。5の底部外面の一部には黒斑がある。

壺形土器 (6-15) 全体の器形は判らないが、頂部が丸くカーブするものと思う。内面中位が内側にふくらむのは粘土帯接合部であろう。端部は丸くおさめ内外面ヘラ磨きを施す。内面の縁辺が2~3cm幅でススけている。

#### 壺形土器 (図5, 7)

壺形土器Ⅱ B-1 (5-18, 24, 29, 40, 42, 44, 46, 7-49, 51) すべて、口唇部に刻目を有する。口唇部全面につくもの (18, 24, 29, 40, 44, 49, 51) と下半につくもの (42) がある。口唇部の形態は垂直な面をなすもの (24)、丸くおさめるもの (18, 44, 46, 51)、斜め上向きの面をなすもの (29, 40, 42, 49) がある。18は頸部外面以下縱方向のやや荒いハケ調整、口縁部外面はハケ調整の後横方向のナデ調整、口縁部内面は横方向のやや荒いハケ調整を施す。24, 29はやや大型の壺形土器である。24は頸部に1条のヘラ描き沈線を有する。29は如意形のカーブが他の土器に比して少し直線的に外方に伸びる。口唇部の刻目は上端が浅く下端に深い。口縁部外面は横方向のナデ調整、内面は横方向のハケ調整後、横方向のナデ調整を行う。胴部外面は二種類（幅の広いものと幅の狭いもの）の原体によるハケ調整をなし、頸部以下4~5cmは縱方向、それ以下は縱及び斜め方向の調整を施す。調整後頸部に2条のやや太いヘラ描き沈線を巡らし沈線間に刺突文を施す。また体部外面はほぼ全面がススけている。40は口縁部内外面横方向のナデ調整、胴部外面は斜め方向（右→左上）のハケ調整を施す。胴部内面は板状工具による横方向の擦痕が斜めに残るのが僅かに観察できる。頸部に3条のヘラ描き沈線を有する。そしてこの文様帶以外は全面がススけている。40の刻目は29と同様である。42は口縁部内面横方向、外面斜め方向（右→左上）方向のハケ調整、口縁部外面には指頭圧痕

が残る。頸部に断面三角形を有する施文具による沈線3条を巡らす。44は頸部に2条のヘラ描き沈線を有し沈線間に刺突文が入る。器表の荒れがひどく調整の観察不能。46は器表の割離が激しく調整観察不能なるも頸部に僅かに2条のヘラ描き沈線を認む。胎土は他の土器に比べて大粒の砂粒を多く含む。49の内面は横方向のナデ調整、外面は横方向のハケ調整を施す。51は頸部内面横方向のハケ、口縁部内外面は横方向のナデ調整を施す。

壺形土器ⅡB-2(5-3) 双線による4条の沈線を有し、更に同じ施文原体によって上弧の重弧文を有する。沈線は極めてシャープでありその断面は長方形をなす。従って半截竹管を原体とするものでない。頸部の沈線間に棒状工具による刺突文を有する。体部外面は縱及び斜め方向(左←右下)のハケ調整を施し、口縁部内外面は横方向のナデ調整を施す。

壺形土器ⅡC(7-41) 口縁部が直角に屈曲し水平な面をなす。口唇部は垂直な面をなし、下半に刻目を施文する。

壺形土器底部(7-7, 9, 10, 14, 17, 19, 22, 23, 30, 31, 32, 55) 底部がやや外方にシャクレるもの(10, 23, 30, 31)、上げ底風のもの(7, 9)がある。ほとんどのものが縱方向のハケ調整を行う。19, 10, 55は底部の成形を観察することができる。またほとんどの土器の底部内面は体部との接合の際の指頭圧痕が残る。10の底部には粗圧痕が、23の底部外面には植物織維の圧痕がついている。

#### (4) SD2 (図4, 7)

##### 壺形土器

壺形土器ⅡA(7-1) やや大型厚手の土器である。口唇部は斜め上向きの面をなす。刻目は口唇部下端より強く施文する。頸部に1条のヘラ描き沈線を有する。段部を持つが極めて弱く、その成形は横方向の強いハケ調整によって作られたものである。

壺形土器ⅡB-1(4-2, 4, 5) 2は小形の壺形土器で如意形に外反する口縁部を有し口唇部は丸くおさめる。全面にヘラ磨き調整を施す。4は口径と腹径がほぼ同じもので、口唇部は斜め上向きの面をなす。外面全体にヘラ磨き調整、内面は割離が激しく調整観察不能。鉢形土器の可能性がある。5の口唇部は斜め上向きの面をなし、その上端と下端とに刻目が入る。上を浅く下を深く刻む。

壺形土器ⅡC(4-6) 口縁部の成形手法は如意形口縁の手法と同様であるが、口縁部が下方に向くほどに強く屈曲させている。口唇部全面に深い刻目が入る。

壺形土器ⅢB-1(7-3) 口縁部がやや直線的に外反しその端部がやや肥厚する。口唇部は丸くおさめる。頸部に8条のヘラ描き沈線を有す。胴部は直線的に下降し内外面ヘラ磨き調整をなす。

#### (5) P1 (図4)

壺形土器ⅡA(4-13) 口縁部はなめらかに外反し口唇部は丸くおさめ横方向のナデ調整を施す。口縁部内外面ともに丁寧なヘラ磨き調整、口縁部外面には指頭圧痕が残る。口頸間に段部はⅠAに比べて極めて弱くヘラを押しあててつくったものである。

壺形土器ⅡE(4-7) 口縁部は直線的に外反し端部の近くでやや屈曲する。口縁部下端に太いヘラ引き沈線が1条入る。器表の荒れがひどく調整観察不能である。

#### (6) A・B地区包含層(耕作土・床土)出土の土器

##### 壺形土器(図8)

壺形土器ⅡB-1(8-3, 4, 8, 10, 12) すべて如意形口縁を有し口唇部に刻目を有す。口唇部の形態は丸くおさめるもの(8, 10), 斜め上向きの面をなすもの(3, 4, 12)があり, 刻目は口唇部全面につくもの(8, 4, 10), 下半につくもの(3, 12)がある。3は頸部に2条のヘラ引き沈線を有する。外面縦方向のハケ調整, 4は1条のヘラ引き沈線を有す。口縁部外面横方向のナデ調整, 脊部外面は縦方向のハケ調整を施す。8は頸部に1条のヘラ引き沈線を有する。10, 12は沈線を持たないもので12は大きな刻目を強く施している。

壺形土器ⅢB-1(8-6) やや直線的に外反する口縁部を持ち口唇部は丸くおさめ刻目はもたない。頸部に10条のヘラ引き沈線を有す。口縁部内外面及び脊部外面はヘラ磨き調整をなす。赤褐色の胎土である。

土器底部(8-2, 5, 7, 9, 11, 16) 7は壺形土器底部で他はすべて壺形土器底部である。どれも器表の荒れがひどく調整の観察不能である。11は充填していた粘土がはずれたもので底部の成形手法を観察することのできる好例である。16は外面全体がススけており底部外面に擦痕を持つ。

#### (7) A地区擾乱層出土の土器

##### 壺形土器(図8, 9, 10)

壺形土器ⅡB(8-27, 28) 27はなめらかに外反する口縁部を有し口唇部はナデにより面をなす。内外面ハケ調整後に丁寧なヘラ磨き調整、口頸間に2条のヘラ引き沈線が走る。28は口唇部を丸くおさめる。全面横方向のナデ調整、口唇部は強いナデのために一部下方に肥厚するところがある。口縁部の成形は幅広い粘土帯を外縁に貼りつける手法を用いる。28はⅡAとなる可能性がある。

壺形土器ⅡE(8-19) 口縁部の外反の度合が少ない。口唇部はほぼ垂直な面をなし細いヘラ引き沈線が1条入り、上下に刻目が入る。口頸間に段部をもつが、この段は粘土帶接合時に生じた高低を残したものである。

壺形土器ⅢF(9-29) 口唇部は垂直な面をなし太いヘラ引き沈線が1条走る。口縁部内面にも太いヘラ引き沈線が2条走る。口縁部外面は荒いハケが縦方向に入り、口唇部下端より1~

2cmは横方向のナデ調整でハケ目を消している。

壺形土器胴部（9-17）木葉文を有する胴部破片である。上下左右に2条のヘラ描き沈線で区画しその間に木葉文を描いている。いわゆるXの入る木葉文でD型に属する。そして木葉文を構成するヘラ描き沈線はXの交点と4つの端部には集合しない。器面調整はヘラ磨きを施してあったと考えられるが十分には観察できない。

壺形土器底部（9-10, 13, 16, 22, 24, 10-11, 14, 21）14, 22は大型壺形土器の底部である。14は胴部との接合部より破損している。24はやや上げ底風の底部であり、器面の荒れがひどいが縦方向のハケ調整を僅かに観察することができる。13は内面に胴部との接合の際の指頭圧痕が残る。大形壺以外の底部の成形はすべて粘土充填によるものである。

#### 壺形土器（図9, 10）

壺形土器ⅠA（9-1）口縁部が強く屈曲し直線的に外方へ伸び、口唇部は垂直な面をなし上下に刻目を有する。器面調整は観察不能であるが、外面全体がススけている。口縁部の形態・刻目・段部に刻目などを持たないこと等ⅠAとは感触を異にする要素が強い。

壺形土器ⅡB-1（9-3, 4, 6, 25, 26）6はしっかりした段部を有する点ではⅠAに分類すべきであるが、段部に刻目を持たない点で異なるし、ヘラ描き沈線を有するのでⅡBに分類した。

口唇部の形態は丸くおさめるもの（4, 6, 25）、垂直な面をなすもの（3）、斜め上向きの面をなすもの（26）がある。また刻目を有するもの（4, 6, 25）と有しないもの（3, 26）とがある。3は口唇部ナデ調整のために端部が上方に少し肥厚する。4はやや小型の土器である。2条のヘラ描き沈線が巡り、沈線上の指頭圧痕は施文後についたものである。25は口径より腹径が大きい特異な土器である。頸部に幅4mmを測る太い沈線が1条入る。器面調整は口縁部内外面横方向のハケ目地の上に横方向のナデ調整を施す。胴部外面は無秩序な方向のハケ調整を施す。26は屈曲部外面に指頭圧痕、口縁部内面横方向、胴部外面縦方向のハケ調整を施す。

壺形土器ⅢC（9-2, 5）共に口唇部に刻目を有し口縁部内外面横方向のナデ調整を施す。2の内面には指頭圧痕が多数残る。5は胴部外面縦方向のハケ調整、内面は板状工具による横方向（右→左）のナデ調整を施す。また頸部内面に棱をつくる。

壺形土器底部（10-7, 8, 9, 12, 18, 20）7は脚付壺形土器と呼ぶべきものであろう。底部に向って直線的に窄まる胴部を有し、脚部はやや内湾ぎみに外方へ伸びその端部は内側へ肥厚する。脚部外面は縦方向のハケ調整を施す。また胴部・脚部の一部が火を受けている。9は粘土円板を底部にくっつけた特異な底部である。8は胴部下半に18は底部外面の一部に黒斑がある。

### (8) D 地区 遺物包含層の土器

#### ① 前期土器

##### 壺形土器 (図10, 11, 14, 15, 16, 17)

壺形土器 I B (10-67) 段部以下が破損している。この段部は口縁部外面に粘土帯を貼り付けて段部を形成している。口縁部内外面丁寧なヘラ磨き調整を施す。

壺形土器 II A (10-27, 28) 段部の成形はともに口縁部外面に粘土帯を貼り付けておこなっており、ともに段際をヘラで押えている。27口縁部内面、口唇部は横方向、口縁部外面縦方向のハケ調整を施し、その下地の上を全面ヘラ磨き調整をする。28は段部より1.5cm上方までは直線的に立ち上がった後に大きく外反する口縁部を有する。全面ヘラ磨き調整を施す。

壺形土器 II B (11-40, 42, 83, 84) 83は口頸間に1条のヘラ引き沈線を有するが、他のものには有しない。83は沈線より約1.5cm上方より口縁部が大きく外反する。口唇部は斜め上向きの面をなす。器表面の荒れがひどく調整の観察不能。42は直線的に外方へ伸びる口縁部である。口縁部外面の一部に7条の極細のヘラ引き沈線を有する。全面ヘラ磨き調整を施す。また口縁部内面に切頭痕が残る。84は内外面ヘラ磨き調整をなす。粘土帯接合部を観察することができる。40はやや肥厚しながら外反する口縁部を有し、口唇部は斜め上向きの面をなす。全面ヘラ磨き調整を施す。

壺形土器 II E 類 (10-121) 口頸間に2条のヘラ引き沈線を有し口唇部にも1条のヘラ引き沈線が走る。口縁部内面横方向のハケ調整の上にヘラ磨きをかける。口縁部外面上部は斜方向(右→左上)のハケ調整、それより下は縦方向のハケ調整を施し更にそれぞれのハケ調整の接点を横方向にナデ調整している。

壺形土器 III A (14-17, 122) 17は極めて弱い段部が残るが、口縁部が大きく発達するのでIII Aに入れた。段部は粘土帯接合時に生じたものであるが、段をヘラで押えている。口唇部は横方向のナデ調整によって面をなす。口縁部内外面ヘラ磨き調整をなす。122は削り出し突堤状に段部を造り出しており段上に3条のヘラ引き沈線を有する。口縁部が欠けているが17と同様の形態をなすものと考えられる。段以下は縦方向のハケ調整・口縁部外面は横方向のハケ調整の後ヘラ磨きをかけている。

壺形土器 III B (14-3, 18, 20, 25, 48, 63) 頭部に1~5条の沈線を帯状にめぐらすものである。口縁部の外反の度合が大きいもの(20, 48, 63)と小さいもの(3, 18, 25)がある。20はやや内傾ぎみに立ち上がる頭部から大きく外反する口縁部を有する。口縁端部を指で押えつけるために口縁部中位がやや肥厚する。口縁部外面縦方向のハケ調整後部分的にヘラ磨き調整をなす。口頸部内面横方向のヘラ磨き調整を施すが、一部下地のハケ調整が観察できる。48は頭部より丸く外反する口縁部を有し口唇部は丸くおさめる。頭部にやや細い4条のヘラ引き沈線を有する。口縁部屈曲部内外面には指頭圧痕が残り、特に内面には指紋と共に明瞭に残る。口頸部外面縦方向のハケ調整後部分的に横方向のナデ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整後ナデ調整を行っている。63は口唇部は垂直な面をなすが、ナデ調整により部分的にやや下垂

したところができる。頸部に3条のヘラ描き沈線がめぐる。頸部外面縦方向、内面横方向のハケ調整を施す。3は頸部に太い1条のヘラ描き沈線を有す。口唇部は横方向のハケ調整によって整えナデによって仕上げている。口縁部外面縦方向、内面横方向のやや荒いハケ調整を施す。18はゆるやかに外反する口縁部を有し口唇部は面をなす。頸部には3条のヘラ描き沈線を有し、沈線間に縦長の刺突文を有する。器表面の荒れがひどく調整観察不能。

壺形土器Ⅲ C (14-4, 116, 15-5) 口唇部が面をなすもの (116) と丸くおさめるもの (4, 5) がある。116は口唇部に1条のヘラ描き沈線をめぐらす。4, 5は外面ヘラ磨き調整、116は縦方向のハケ調整を施す。

壺形土器Ⅲ D-1 (15-61) 断面長方形の太い貼り付け突帯を有するものである。頸部からやや直線的に外反し端部近くで少し屈曲する口縁部を有し、口唇部は丸くおさめる。突帯上にはヘラ描き沈線が1条めぐり沈線を切断するような形で刻目が入る。また突帯直上には1条のヘラ描き沈線がめぐる。

壺形土器Ⅲ D-2 (17-124) 幅広の扁平な貼り付け突帯を有するものである。突帯上には梢円形の刺突文が3列に並ぶ。

壺形土器Ⅲ E (16-11) 口縁部外面端部に粘土組を貼り付け口縁部を厚くしている。貼付部外縁は刺突文が一周する。

壺形土器頸部破片 (11-115, 15-119, 17-118, 134, 142) 115は頸部破片である。頸部区分文様としての段を有す。この段部は粘土帶接合時に生じたものである。119は頸部に4条のヘラ描き沈線を施したものである。ともに外面全面ヘラ磨き調整を施す。118は頸部を区分する段部が僅かに残り段部下に3条のヘラ描き沈線が入る。さらにその下にヘラ描きによる綾杉文を施す。134はやや太い1条のヘラ描き沈線が頸部を区分する。あきらかに段部を意識した施文である。その下の胴部上端に細い1条のヘラ描き沈線が走りその下に木葉文の1部が観察できる。142は上段棒状工具による4条の沈線帶、下段同工具による5条の沈線帶を有し、上・下沈線間には双線による山形文を施す。この山形文は極めて細くシャープであり、半截竹管によるものではない。壺形土器Ⅲ A-1 (138) と同様の施文具が考えられる。

#### 鉢形土器(図15)

鉢形土器Ⅲ A (15-1, 87) 口径が40cm以上の大型のものである。如意形口縁を有し、ともに口縁部折り曲げの時につけた指頭圧痕が残る。口縁部内外面横方向のナデ調整、頸部内面横方向の荒いハケ調整、胴部外面は縦方向の荒いハケ調整を施す。これらの土器片には把手を欠ぐが、完形品には2~4個の把手を持つタイプである。

鉢形土器Ⅲ B (15-13, 34) 直口する口縁の端部に断面三角形の太い粘土帶を接合して口縁部としたものである。口縁部内外面は横方向のナデ調整、34は胴部外面に板状工具による横方向のナデ調整が僅かに観察できる。本類も上胴部に2~4個の把手を持つものと考えられる。

壺形土器 (11-111) 壺形土器の蓋である。頂部上面は水平な面をなし笠部はゆるやかに外方に開く。笠部外面丁寧なヘラ磨きを施す。また頂部から笠部にかけて大きな黒斑がある。

#### 壺形土器 (図11, 12, 13, 14, 15, 16)

壺形土器 II B-1 遺物の量が多いので、(1)頸部に沈線を欠ぐもの、(2)1条の沈線を有するもの、(3)2条の沈線を有するもの、(4)3条の沈線を有するもの、(5)沈線間に刺突文等を有するものにそれぞれまとめて説明する。

##### (1) 頸部に沈線のないもの (11-11, 19, 20, 33, 38, 12-54, 55, 64, 68, 69, 78)

69以外すべて口唇部に刻目を有するが施文の仕方によって2つに大別できる。すなわち口唇部全面につくもの (11, 19, 38, 55, 64, 68) と下端につくもの (33, 54, 78) とがあり、下端につくものはすべて口唇部が斜め上向きの面をなす。33, 55, 64, 78は口縁部外面を横方向に強くナデしている。78は胴部外面板状工具による横方向の擦痕 (左→右) がみられる。64の頸部外面には斜め方向にやや荒いハケ調整を施す。また刻目のつけ方が他の土器に比べて極めて密である。53, 68も密に刻目を施しそれによって口唇部下端がやや下垂している。11は口唇部に刻目を施文後横方向に強くナデしている。頸部内面には指頭圧痕が残る。胴部外面横方向のハケ調整、口縁部外面の一部にススが付着する。69は口唇部を丸くおさめ刻目を持たない。強いナデ調整の為に口唇部がやや上方に肥厚する。胴部外面の一部にススが付着している。

##### (2) 頸部に1条の沈線を有するもの (12-2, 10, 12, 36, 46, 65, 76, 13-35, 56, 57, 58, 60, 73, 14-9) 口唇部に刻目を持たないものと刻目を持つものとがある。前者のうち10, 46, 56, 76は口縁部が急激に外反し口縁部外面にかなり強い指頭圧痕が残る。口頸部外面及び胴部外面は斜め及び縦方向のハケ調整を施した後、口縁部外面及び口唇部に横方向のナデ調整を施す。65は口唇部及び口縁部外面横方向のナデ調整を行い沈線下は横方向のヘラ磨き調整をなす。

口唇部に刻目を有する後者は、36, 60が下半に施文する以外はすべて全面に施す。器面調整にはハケを用いるものと用いないものとがある。2, 12は口縁部外面に斜め方向 (右→左上) に施して口縁部折り曲げの際に指頭圧痕を消そうとしている。その後口縁部外面に横方向のナデ調整を施す。2は口唇部のナデ調整の際にやや上方に摘みあげている。胴部外面縦方向のハケ調整をなす。两者とも刻目は丁寧且つ強く施文している。36, 60は斜方向 (右→左上) のハケ調整、頸部内面にも横方向のハケ調整をなす。两者ともに口縁部外面極めて丁寧な横方向のナデ調整を行っている。おそらく下地にあったハケ目を完全にナデ消しているものと思う。58の口唇部は垂直な面をなし刻目は口唇部下端より深く乱雑に施している。沈線下胴部外面上位は斜め方向 (右→左上)、中位は縦方向のやや荒いハケ調整を施す。口縁部外面は丁寧な横方向のナデ調整、また外面の一部にススが付着する。35, 9は口縁部外面及び胴部外面をナデ調整、35は外面全面がススけていている。9は胴部外面の一部

に大きな黒斑を持つ。

(3) 頸部に 2 条のヘラ描き沈線を有するもの (13-6, 41, 72, 85, 14-29, 30)

29, 45以外はすべて口唇部を丸くおさめる。29の口唇部は斜め上向きの面をなし刻目は口唇部を一周せず刻目を施さない箇所が存在する。6, 30, 45, 72は口縁部を折り曲げる時にいた指頭圧痕が明瞭に残る。

器面調整は各土器ともに口縁部内外面横方向のナデ調整をなす。41は頸部外面以下を斜め方向 (右→左上) の、72は縦方向のハケ調整を施す。他のものは器表面の荒れがひどく調整の観察不能である。41, 72は頸部外面及び口縁部外面にススが付着、6は頸部外面に大きな黒斑を持つ。

なお 6, 45の胎土は 5 mm 内外の大粒の砂を多量に含んでいる。

(4) 頸部に 3 条の沈線を有するもの (14-8, 26) 8は口唇部全面にやや密度の高い刻目を有す。口縁部外面縦方向、内面横方向、胴部外面斜め方向 (右→左上) の荒いハケ調整を施す。26は口唇部を丸くおさめその下半に浅い刻目が入る。口縁部内外面横方向のナデ調整、胴部外面には縦方向のハケ調整を施す。また胴部外面にはススが多く付着する。

(5) 頸部沈線間に刺突文を有するもの (11-37, 14-14, 90, 117)

37は頸部に 3 条のヘラ描き沈線を有し、沈線間に棒状工具による刺突文を上下二列に配す。口唇部はほぼ垂直な面をなしやや密な刻目が全面に施文される。口縁部外面は横方向のナデ調整を施す。14, 90は 2 条のヘラ描き沈線間に梢円形の刺突文が一周する。14の口唇部は斜め上向きの面をなし上端に浅く下端に深い刻目を施す。90は口唇部を丸くおさめ口唇部下方に刻目を施す。ともに口縁部外面を横方向にナデ調整する。117は 1 条のヘラ描き沈線を有しその下段に管状の刺突文が一列に並ぶ。

菱形土器 II B-2 (14-52, 66, 80, 12-62) 双線を有するものである。沈線間の断面観察によって施文原体を 2 つに分けることができる。断面カマボコ状を呈するもの (52, 80) と台形ないしは長方形のもの (62, 66) である。82, 52の口唇部は丸くおさめ刻目は全面に強く施される。52は口縁部折り曲げの時にいた指頭圧痕が残る。共に口縁部内外面横方向のナデ調整。62, 66の双線は前者のそれに比べて極めてシャープである。62は口縁部内面及び外面の口唇部近くは横方向のナデ調整、それ以下は斜め方向 (右→左上) のハケ調整。66は口縁部内外面横方向のナデ調整、双線以下胴部外面は斜め方向 (右→左上) のハケ調整、頸部内面には横方向のハケ調整が僅かに残る。

菱形土器 III A-1 (13-21, 15-110, 113, 138) 口縁部上面が水平な面をなすものである。21は口唇部にやや太い刻目がやや密に施され、口縁下には太い棒状工具による沈線が 2 条めぐる。胴部内外面棒状工具による横方向のナデ調整を施す。110は直行する口縁上端に断面三角形の粘土板を接合している。7条のやや太いヘラ描き沈線をめぐらす。器面の荒れがひどく調整観察不能である。113は厚手で頑丈な口縁部を有する。口唇部は垂直な面をなし、しっかりした刻目がやや密に施されている。4条のヘラ描き沈線を有する。胴部外面縦方向のハケ調整、

内面は横方向のナデ調整を施す。138は頸部に双線を有し、沈線間の断面は長方形を呈し、双線は極めてシャープである。

壺形土器ⅢA-2(15-88) 口縁部上面が外方に下垂するものである。口唇部は丸くおさめ非常に弱い刻目を施す。全面ナデ調整をなす。

壺形土器ⅢB-1(16-7, 15, 23, 31, 39, 70, 77, 114) 口唇部が垂直な面をなすもの(7, 15, 39)と丸くおさまるもの(23, 31, 70, 77, 114)とがある。両者ともにやや密な刻目がつく。7, 15は垂直な口唇部が部分的にやや下垂している。両者ともに刻目は深く丁寧に施し、頸部に8条のヘラ描き沈線を有す。7は口縁部内外面及び胴部内面に丁寧な横方向のナデ調整、15は口縁部内外面やや強い横方向のナデ調整、胴部外面は不規則なハケ調整、内面は横方向のナデ調整を施す。39は口唇部が部分的に上方へ跳び上がっているが、刻目施文の時に生じたものである。また口縁部を強く折り曲げるために、口縁部内外面に指頭圧痕が残る。5条のヘラ描き沈線を有す。口頸部外面、胴部内面にハケ調整、口縁部外面の一部にススが付着する。23, 31は5条の沈線を有す。23は口縁部内外面横方向のナデ調整、外面の下地には縦方向のハケ調整。胴部外面縦方向、頸部及び上胴部内面には横方向のハケ調整を施す。31は口縁部外面横方向のナデ、内面は横方向のハケ調整の下地の上に横方向のナデ調整をなす。口縁部及び胴部全面にススが付着する。70は口唇部にやや細い刻目を施す。4条のヘラ描き沈線を有する。口縁部内外面丁寧なナデ調整。胴部外面縦方向のハケ調整を施す。特に最下の沈線より約0.5mm下でハケ状工具を停止させているので停止線が一線に並びその部位が段状を呈す。77は8条の太いヘラ描き沈線を有す。口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部内外面は器面の荒れがひどく調整観察不能である。114は他の土器に比べて口縁部の外反の度合が少ない。4条のヘラ描き沈線を有す。口縁部外面縦方向のナデ調整、頸部内面横方向のハケ調整が僅かに認められる。

壺形土器ⅢB-2(16-16, 71, 81) 口唇部は斜め下向きの面をなす。口唇部に太く浅い刻目を施す。頸部外面及び口縁部内外面は条痕を思わせるような横方向の荒いハケ調整を施す。16の胴部外面には大きな黒斑を持つ。

壺形土器胴部破片(15-108) 5条のヘラ描き沈線を有し、胴部外面斜め方向(右→左上)の不規則なハケ調整、内面は板状工具による横方向のナデ調整を施す。

## ② 中期土器 (図16, 17)

壺形土器(16-50, 51, 75, 86, 17-49, 125, 126, 127) 50, 51, 86は粘土帯貼付の口縁を有するものである。50は直線的に立ち上がる頸部から丸く外反する口縁部を有し、口唇部は面をなす。口頸部内外面横方向のナデ調整をなす。51はやや小形の壺形土器で頸部内面横方向のハケ調整、内面ヘラ磨き調整を施す。86は直線的に外方に伸びる頸部に外反する口縁部がつく。口唇部は面をなし一部下方に肥厚する。貼付部に指頭圧痕が明瞭に残る。75の口縁部は頸部より丸く

外反し、その端部はナデ調整によって誤ね上がる。口頸部内外面ナデ調整、頸部と胴部の接合部外面がゆるい段状をなす。49はⅢEの系統を引く土器である。胴部に比べて口頸部が著しく発達している。口縁端部外面は幅1cm、厚さ3mmの粘土帯を接合して貼付口縁を成形している。口唇部下間に刻目を施し、頸部下半には櫛描き沈線を施す。更にそれを縦に切るように細いヘラ描き沈線が頸部上端より走る。櫛描文の下には断面三角形をなす微隆起帯を貼付し更に梢円形浮文を貼付する。器面調整は頸部内面横方向、胴部外面積及び斜め方向のハケ調整を施す。125は断面三角形の突帯を有しその上に櫛描波状文を施す。126は櫛描格子文と櫛描波状文をもつ。127は櫛描波状文を有しヘラ磨き調整をなす。

**菱形土器（16-112）** 頂部上面は水平をなし端部が外方に肥厚する。体部は上から直線的に外方に下降し中位で屈曲し外方へ大きくカーブする。内面上位にヘラ削りがある。

## II 石 器

A地区遺構内及びD地区包含層より40数点の出土をみた。

### 1. 石 織（図18）

#### (1) 打製石織（39, 40, 41, 42）

打製石織は基部の形態から、すべてが凹基式石織であり材質はサヌカイトである。またすべてがA型に属する。さらに凹基の形態によって3つに分類することが可能である。

番号	39	40	41	42
全長(cm)	2.2	2.0	1.96	2.15
全幅(cm)	1.7	1.6	1.55	1.7
全厚(cm)	0.3	0.3	0.27	0.37
重量(g)	2.0	1.0	1.0	1.0

a. 比較的なめらかな円形の凹基をもつもの。（40, 42）

b. 鋭い三角形の凹基をもつもの。（41）

c. 馬蹄形の凹基をもつもの。（39）

調整に関しては、それらが表裏全面に施されるもの（41, 42）と、表裏に大きな剝離面を残し縁辺部のみに限って行われたもの（39, 40）がある。特に39は縁辺部を鋸歯状に調整している。前者の断面は菱形に近く、後者のそれは扁平な六角形（39）ないし五角形（40）をなす。

40はSD3埋土I層上位より出土した。第3類土器に伴うものである。他の3点はD地区包含層より出土したものである。

#### (2) 磨製石織（43）

いわゆる柳葉形磨製石織であり、基部と頂部を欠くが現存長3.6cm、幅1.1cmを測る。完形推定長5cm大を測るものと考えられる。中位に最大幅をもつものである。表裏ともに斜め向きの研磨による擦痕が極めて明瞭に残る。また基部近くに稜線が走る。さらに中位の表裏面には研磨によって平坦面が作られている。石材は粘板岩でありD地区包含層より出土した。

## 2. 石包丁 (図20-4, 19)

4はD地区包含層より土器(49)と重なり合って出土した。半分に破損しているが復元できる。長さ9.85cm、幅4.5cm、厚さ0.5cm、重量48gを測る。大きさとしてはやや小形のものに属する。形状は半月形をなし、刃部は直線で片刃である。縦孔は双孔とも両側より穿孔している。両側面とも縦及び斜方向の荒い擦痕がみられるが、刃部には擦痕は見られず丁寧に磨かれている。刃部に残る使用痕は中央部において最も著しい。

また短辺の一方の部分に著しい叩打痕を残しているが、この使用痕は石包丁の本来の機能からは説明できないものである。ストーン＝リッチャとして転用されたものであろうか。叩打痕のつかない方の短辺とその周辺部は極めてなめらかで擦痕も消えている。使用する時、手のひらに接する部分であったのだろうか。

19はC地区の擾乱層より出土した。4に比して雑な作りである。全長9.73cm、全幅5.12cm、厚さ0.8cm、重量70gを測る。形状は長方形をなし背部は直線、刃部はやや外湾的な直線刃で両刃である。短辺の両側に縦かけのくぼみを作っている。両面とも縦方向に研磨しているものの削離面もかなり残っている。刃部の全面に使用痕が残っているが特に中位に激しく残る。

なお、片側の短辺には縦かけ用のくぼみが2つ形成されているが、下方は成形の途中で放棄したものと考えられる。石包丁を持った時、右手の親指の力がかかるところは両面ともややくぼんだ状態になっている。また両側縁の上部には左右対称に叩打痕が残る。これも石包丁本来の機能とは関係のないもので転用が考えられる。

## 3. 石斧 (図19, 20)

### (1) 磨製石斧 (16, 27, 29)

大型蛤刃石斧及び柱状片刃石斧である。ともに一部欠損している。

#### (a) 大型蛤刃石斧 (19-16, 20-29)

ともにD地区包含層より出土した。16は現存長14.25cm、全幅7.25cm、全厚5.28cm、重量950gを測る。後側縁及び前側縁には研磨の際の条線が残る。頭部を欠く。刃部の後側縁に近い方の半分は刃こぼれが極めて激しく、それによって刃部のカーブが変形している。また左正面には刃縁に斜向する使用痕、右正面には逆方向をなす使用痕がある。閃緑岩で作っている。

29は現存長8.52cm、全幅3cm、全厚2.3cm、重量115gを測る。四分の一ほどの欠損品である。左右正面の半分と後側縁が残る。しかし左正面も縦にはぎとられるように欠損している。右正面の刃部に右上→左下の使用痕が僅かに認められる。刃縁に直行する欠損面はよく研磨されており、砥石として転用されたものであろう。石質は緑色片岩である。

#### (b) 柱状片刃石斧 (20-27)

S D 1床面に付着した状況で、後述する石刀より70cm程西で出土した。現存長14.6cm、全幅5.65cm、全厚2.4cm、重量320gを測る。右側縁部と頭部が斜めに切られたように欠損しているが、欠損面以外のすべての面は非常によく研磨され光沢をはなっている。両正面に刃縁に直

行する使用痕が認められる。また頭部側の欠損面に丹が塗られている。もちろん石斧破損後に丹を塗ったものと考えられる。結晶片岩製である。

(2) 打製石斧(22-6, 7, 8, 28, 32, 34)

8以外はすべて破損している。局部磨製を施すもの(28)とそうでないものに分けることができる。局部磨製を施さないものは正面の一方に自然面を残すもの(6, 7)と、両正面が剥離面のもの(34)とに分けることができ、また両正面に自然面を残すもの(8)がある。これらの刃部には磨製石斧の刃部でみたような条眞的な使用痕を認めることができない点に、縦斧か横斧かを使用痕から決定づけることはできないが、一応横斧として使用されたものと考え観察をする。粘板岩ないし頁岩で作るが、34は蛇紋岩製である。短冊形・楔形に分れる。

6は前正面に自然面があり後正面が剥離面となる。後正面の刃部に激しい使用痕が残り、あたかも階段状に剥離をしたような使用痕を残す。また両側縁は細部調整によって形を整えている。

7も自然面が前正面で剥離面が後正面となる。よって刃部の使用痕は当然後正面に残る。

8は両側縁に細部調整を施して形を整えている。刃部は後正面に使用痕が著しい。

28は局部磨製を施したものである。局部磨製は前正面に多く後正面に少ない。左右両側縁を調整して形を整えている。刃部は三角形のようになっているが全体の形からして一方が破損したのではなく、はじめから先のとがった刃部を形成していたものと思う。刃部の使用痕は当然後正面に多く見られる。

34は湾曲刃で、他の個体が直線刃であるのと異なる。後正面を階段状に剥離することによって形を整えている。

#### 4. 命石(図21, 23, 24, 25, 26, 27)

研磨を施したもの、河原石を簡単に加工したものとに大別する。前者は1例であり、後者が量的も多い。石質は大半が硬砂岩である。

(1) 研磨を施したもの(18)

棒状をなし柄部と打部とからなる。柄部は大部分が欠損しているので全長は不明である。打部は約10cmを測る。最も幅の広い面を側面と呼び、柄部から直線的にのびる打部を背部と呼ぶ。溝痕は打部背部、腹部の両方にアバタ状に残り、背部の前半分と腹部の手前3分の1と前3分の1にみられる。両側面では溝痕は全くみられず平滑な面をなす。柄部の観察は破損の為に充分にはできないが、握り易いように研磨している。

(2) 河原石に簡単な加工を施したもの

(a) 扁平命石

23個出土しているがすべてが河原石を縦に打削したものである。よって自然面と剥離面からなる。重量は30g～495gまであり平均が約210gである。部位の名称については自然面を表面、剥離面を裏面と呼び、また長軸に平行な縁部を長側縁部、短軸に平行なそれを短側縁部、曲り部を曲縁部とそれぞれ呼称し、これら全てを縁部と呼ぶこととする。

溝痕の残る部位は表面、長側縁部、短側縁部、曲縁部であり、裏面に溝痕の残る例は1例もない。これら扁平叩石は平面形状、溝痕の強弱、またはその部位などによって分類することが可能である。

平面形状は橢円形が圧倒的に多いが、変形橢円(2)、不正円形(14)、半円形(20)も在する。(2)は二次的に片側が破損したのではなく、振り易いように意図的に調整したものと考える。直線をなす片方の側縁部にも溝痕がみとめられるからである。

溝痕の強弱は荒く残るもの、平滑なもの(13, 15, 23, 37)、そして両者が混在するもの(3, 14)がある。荒い溝痕の残るものが多い。

溝痕の残る部位は縁部全面に残るものが圧倒的に多く、特に短側縁部に多く残るものが卓越している。他に、縁部の一部のみに残るもの(2, 9, 12, 22, 31)、表面に溝痕がアバタ状に残るもの(3, 11, 12, 33, 35)もある。

#### (b) 变球形叩石(26-36)

全く加工を加えていない、河原石そのままを叩石として使用していたものである。重量49.5kgを測り全面にアバタ状の溝痕が残る。

### 5. 回 石 (25-30)

半分が欠損しているが復元すれば直径約20cm前後になるものと思う。両面ともほぼ中央部に凹みが残り、回部はアバタ状である。台石として使用されたものと思う。

### 6. 石 刀 (19-44)

SD1床面より出土した。結晶片岩製で長さ16.5cm、幅4cm、最厚1.6cmを測る。先の部分半分と柄の部分が欠損しているが全長30cm内外を有したものと考えられる。内溝する内側に刃部を有する。全面を丁寧に研磨しているが、柄部にはやや荒い擦痕が認められる。文様は全く存しない。

## III 出土土器についての考察

### I 前期土器

現在西見当遺跡を含む田村遺跡群においては、断続的な発掘調査が進行中である。この調査による成果には目を見張るものがあり、本書作製中にも多くの新事実が明らかになった。弥生前期土器においても、岡本氏もすでに西見当I式土器に先行する突帯を有する東松木式土器を提唱している。<sup>16</sup> 級内においては現在第I様式古段階の遺跡の有無をめぐって論議されているが、第I様式古段階併行の土器に先行する土器型式を有する遺構の存在が明らかになった現在、古・中・新という編年觀では、南四国における弥生時代前期社会を考えることはできない。従って本書においては、便宜的にI類・II類・III類と編年的に分類することとした。一応I類は前期前半に、II・III類は前期後半の土器として記述する。なおI類は從来岡本氏の言う西見当I式に、II類は西見当II式、III類は大様式土器に該当する。

## 1. 胎土・色調

### (1) 胎 土

弥生前期土器の胎土は、中期のそれに比べて一般的にやや大粒の砂粒を多く含むと言われているが、当地方においても全く同様のことが言える。ただ畿内の前期土器などに比べると、当地方のものが一般的により大粒の砂粒がより多量に混入している。また一般的な土器胎土とは全くその性質を異なる特異な胎土を有する土器が、Ⅲ類に出現（16—11）し中期へと続く。この特異な胎土とは一般的な胎土にみられるような砂粒を全く含まず、その構成はいわば「セメント」のよう堅密である。そして現段階においては壺形土器のみに存在し、土器全体の中に占める割合は一割以下である。当地方以外でこの特異な胎土と構成を有する土器を実見したことがない。

次に前期土器の中には砂粒の他に植物纖維を混和材として使用しているふしが若干見られる（1—35）。器表面にのみ纖維痕跡が見られるのは痕跡がつくのと同様の原因が考えられるが、破損した土器断面にも認められるということは、混和材としての植物纖維の利用を否定するものではない。ただし35の場合には粘土帯接合部で破損しているので、振口縁の接合を良くする為に利用された可能性もある。なおこのことは後述する粘土塊とも関連があるのかも知れない。

### (2) 色 調

弥生前期土器の色調は一般的に乳白色・淡褐色のものが多いとされている。当遺跡出土の土器にもそのような色調を有する土器はかなり存在するが、茶褐色・紅褐色のものが一般的である。

## 2. 土 器

### (1) 壺形土器

Ⅰ類は明瞭な段部を有し、Ⅱ類になると段部は弱くなる。10—27、28は口縁部外面に厚い粘土帯を巻きつけているが、段そのものが弱くなり段のなす斜面を丁寧に磨き上げるということはなされていない。ここにⅠ類の段部調整に対する粗雑化が見られる。また段部成形手法は粘土帯接合時に生じたものと、口縁部外縁に粘土帯を接合したものとが存在する。Ⅱ類になると頸部等に段部を有するものは全体的に減少し、ヘラ描き沈線や貼り付け突帯を有するものが出現する。Ⅱ類のヘラ描き沈線は後述するⅢ類に比べて一般的に細い。木葉文が出現するのもこの時期である。明確に削り出し突帯と判断し得たものは第Ⅱ種少条が1例（6—50）のみである。なお貼り付け突帯はこの時期にその初現を見るものではなく、この前段階にも存在するものと考えられる。

Ⅲ類の時期になると壺形土器の種類は一挙に増加し7類を数える。しかし1次、2次調査で出土した大甕式土器には、今次調査では全く出土を見なかったものも多く存在している。すなわち口縁部に円形刺突文を有するもの、口縁部内面に貼り付け突帯を有するもの等である。当然この時期の土器には沈線の多条化がみられ、沈線の籠文具もⅢ類から続くヘラ状工具に加えて棒状工具を用いた太い沈線を有するようになる。沈線の多条化は瀬戸内地方や畿内地方に見られるような数10本をこえるようなものはない。

器面調整はハケ調整の下地の上をヘラ磨き調整するものが一般的である。

## (2) 鉢形土器

今次調査ではⅠ類の鉢形土器は出土しなかった。Ⅱ類は器面調整によって2つに分類した。すなわちハケ調整によるものとヘラ磨き調整によるものである。口縁部はすべて如意形を呈する。Ⅲ類では口縁部の形態によって大きく2つに分類することができる。ⅢAはⅡAよりの発展的形態であると考えられる。ⅢAはⅡAに比べて器壁は薄くなりヘラ磨きは施されず、荒いハケ調整が施されるようになる。<sup>19</sup>ⅢAは東奈良遺跡出土のものと調整・胎土・色調・形態とも酷似している。ⅢBはⅢ類で初めて登場するものである。ⅢBは香川・岡山を含む東部瀬戸内に広く分布するものであり、15-13, 34は専光寺山遺跡出土のものと調整・胎土・色調において酷似するものである。

## (3) 变形土器

### a. 段部

Ⅰ類は2点のみ出土をみた(1-34, 2-8)。両者ともにしっかりした段部を有し段部には刻目・刺突文を有する。Ⅱ類では段部を有するものと有さないものがある。さらに1条～3条の沈線を有するものが出現する。Ⅱ類の段部はⅠ類のそれに比べて極めて弱くヘラで押しながら造り出している(2-3, 10, 32)もの、やや削り出し状をなすもの(2-15)が一般的である。また特異なものとして9-1, 6がある。この段部は粘土帯接合の時に生じたしっかりした段部を有するものであるが、他の要素によって一応Ⅱ類に入れた。

Ⅲ類で段を有するものは1例(6-70)のみであり、縱方向のハケ調整の際に原体を一直線上に停止した為に生じたものである。

### b. 刻目

ほとんどの変形土器口唇部にハケ状工具、ヘラ状工具、棒状工具による刻目が施される。刻目の施文は口唇部の形態によって規定される傾向が見られる。以下証明してみたい。

口唇部の形態は、a. 丸くおさめるもの (Ⅰ-32%, Ⅱ-50%)

b. 垂直な面をなすもの (Ⅱ-16%, Ⅲ-30%)

c. 斜め上向きの面をなすもの (Ⅱ-52%, Ⅲ-0%)

d. 斜め下向きの面をなすもの (Ⅱ-0%, Ⅲ-20%)

に分類することができる。カッコ内の%はⅡ・Ⅲに占めるパーセンテージである。

また刻目が施文される場所は、

A. 口唇部全面に施文するもの

B. 口唇部下半及び下端にのみ施文する。

に分けることができる。

次にⅠ・Ⅱ・Ⅲ類土器について刻目の施文範囲(A・B)と口唇部の形態(a・b・c・d)との関係について見てみよう。Ⅰ類は2例にすぎないが、c-Bである。Ⅱ類はa-Aが32%, a-Bが68%, c-Aは30, c-Bが70%, b-Aの場合は、ほとんどが上端に浅く、下端に深く施文されている。

Ⅲ類は口唇部の形態cは全くなくa・b・dのみが存在し、b-Aが100%、d-Aが100%で、a-A、a-Bはほぼ同じくらい存在している。以上観察の結果、口唇部が垂直な面をなすもの(b)は、両端に施文される2例をのぞいてすべて全面に施文され、斜め上向きの面をなすもの(c)は、70%が下半または下端に施文せられるという傾向を引き出すことができる。ただし丸くおさめるもの(a)についてはⅡ類においてのみ68%がBであり、Ⅲ類においては規則性を見い出すことはできない。しかしながら刻目は口唇部のなす形態によって規定されるという傾向を認めることが可能であろう。

またⅢ類にはc形態が、Ⅱ類にはd形態が1例も存在しないという結果をも導き出すことができた。当地方の前期壺形土器の特徴の1つを見ることがある。

#### c. 調整

当地方の壺形土器は、ハケ調整が多く使用されるという特徴がある。ハケ調整がなされる部分は胴部外面、口縁部内外面においてである。胴部外面に施される場合は縦方向か、左あがりの斜め方向(右→左上)である。右→左上という規則性は壺形土器をさかさにして右手でハケ状原体を動かすことによって生じる。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類それぞれ見ていくと、Ⅰ・Ⅱ類は胴部外面、口縁部内外面とともに多く見られる。Ⅲ類になると胴部外面にはハケ調整がなされるが、口縁部内外面についてはすべて横方向のナデ調整に変わる。

#### d. 文様、施文具

すでに見てきたようにⅠ・Ⅲ類には、頸部外面及び上胴部に各種の文様が施される場合が多い。沈線が圧倒的に多くそれに竹管・棒状工具等における刺突文、上弦の重張文等があげられる。沈線は1条づつ引かれるものと、2条同時に引かれる双線とに分けることができる。さらに双線は断面カマボコ状をなす半截竹管によるもの(14-52, 80)と断面長方形をなすシャープな線をもつもの(62, 66)とに分類できる。後者の施文原体については、巻き貝を縦に切ったものを利用した可能性がある。

双線はⅡ類の壺形土器、Ⅲ類の壺形土器に見られる。播磨・畿内地方においては、櫛描き沈線に先行するものとして「前期Ⅱb段階から盛行する」としている。当地方においては前期後半前業に出現する。

次に1条づつ施文するヘラ描き沈線についてであるが、施文具はいわゆるヘラ状のものと棒状のものがあり、Ⅱ・Ⅲ類ともに両者が使われている。Ⅲ類になると壺形土器と同様に一挙に多条化する。沈線数は最高10本でありそれ以上引かれる事はない。

#### (4) 粘土塊

A-D地区において10数個の粘土塊が出土した。小さなものは3kg、大きなものは47kgを測る。2次調査においても多量の粘土塊が出土し、岡本氏は土器製作に用いる粘土であると述べられている。これらの粘土塊はすべて火を受けており、内部、表面に植物繊維の圧痕が認められる。この植物繊維は混和材と考えられる。また砂粒を多く含んでいるものもあれば全く含んでいないものもある。

## II 中期土器

胎土は前期のものに比べて、砂粒の混入が極めて少ない。細片をみても前期か中期かの判別がつくものが多い。調色・焼成等も前期に比べてむらがない。

今次調査において壺形土器片5、蓋形土器片1が出土した。50、51、86は口縁部外面に扁平な粘土帯を接合させ、その上を指頭で押えつけたものである。壺形土器におけるこの手法は当地方において前期末に出現し後期初頭にまで続く。そして南四国中央部以西に広く分布する。西日本において同手法による口縁部を有する土器を実見したことはないが、唐古に1個体分、長岡京市に1片存在している。当地方からの搬出品の可能性もある。

## 第5章　ま　と　め

西見当遺跡は、弥生時代前期前半に成立した環濠を有する集落遺跡である。今次調査では環濠内の調査であったため、環濠内の各遺構の諸関係、集落の範囲を確認することに主眼をおいたが、集落成立期の遺構を確認することはできなかった。しかし、集落展開期の遺構SD1、SK1、SK2は確認することができた。

遺物の出土状況から、環濠、SD1は埋土中位においてあたかも土器を數き詰めたような状況であるのに対して、SD2からの出土遺物は極めて少なく、かつⅢ類土器が埋土中位より出土している。環濠やSD1は床面より數10cm埋土が堆積し、いわば自然の凹地となったときに一挙に土器が捨てられたと考えられる。その段階においてはSD2はまだ機能していたであろう。しかし、SD2が埋没するのを待たずに西見当の集落の人々は他の地へ移動したのではないだろうか。また西見当遺跡からはⅢ類土器の時期の遺構が全く確認されていない。従って西見当遺跡は前期後半の時期、Ⅲ類土器が使用された時代に盛行し、間もなく終焉を迎えたのではないかろうか。西見当遺跡は短命な遺跡というべきであろう。またそれだけに遺跡の重要さも考えられる。すなわち1～2型式の単純な時期の遺構のみを残すという点である。

集落遺跡である以上居住空間である住居址の存在が問題となるが、これについては第1・2次調査においても全く確認されていないが、D地区の調査結果が示唆を与えてくれる。D地区は自然堤防上の東南端部に位置するものと考えられる。そうであるならば当然集落の端ということが言える。2次調査によって確認された環濠は西方へ大きく伸びる可能性があり、第1次～2次の旧A・旧B・旧C地区及び今次調査のA・B・D地区はいわば集落の東部に位置するのではないかろうか。

次に土器についてであるが、Ⅰ類土器は極少量しか出土せず、Ⅱ類土器が大半を占め、Ⅲ類土器がそれに次ぐ。Ⅰ類土器は板付Ⅱa併行期の土器ともみられ九州系の非常に強い土器である。Ⅲ類土器は壺形土器において複線山形文（1-33）、羽状文（17-60、118）を有する土器が見られるなど古い要素を持つものも存在するが、壺形土器においては、1～3条の沈線、双線を有するなど新しい要

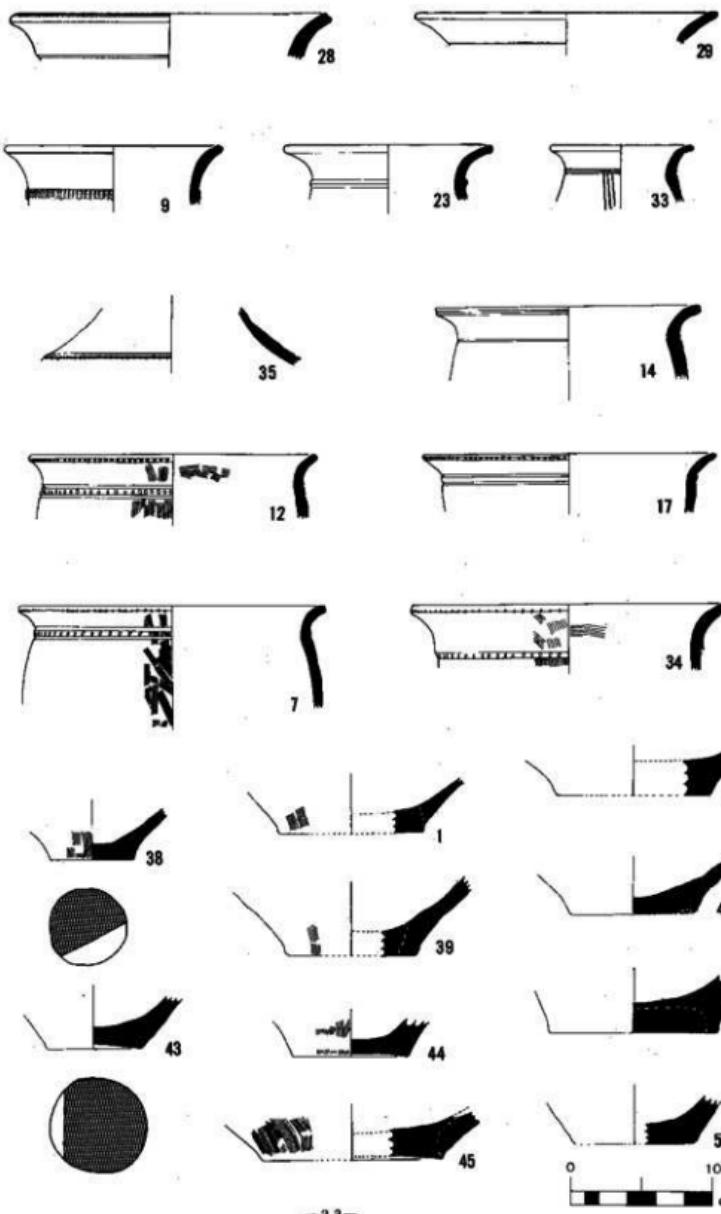
素を持つようになり、九州的というよりは東部瀬戸内・畿内的な要素を強く持つようになる。Ⅲ類土器は阿方式土器の影響をうけて壺形土器・壺形土器の沈線数が一挙に増し、壺形土器においては逆L字口縁が出現し、口唇部の形態も大きく変化する。器種も多くなり、瀬戸内・畿内地方からの搬入品ではないかと思われるほど酷似する土器も登場する。

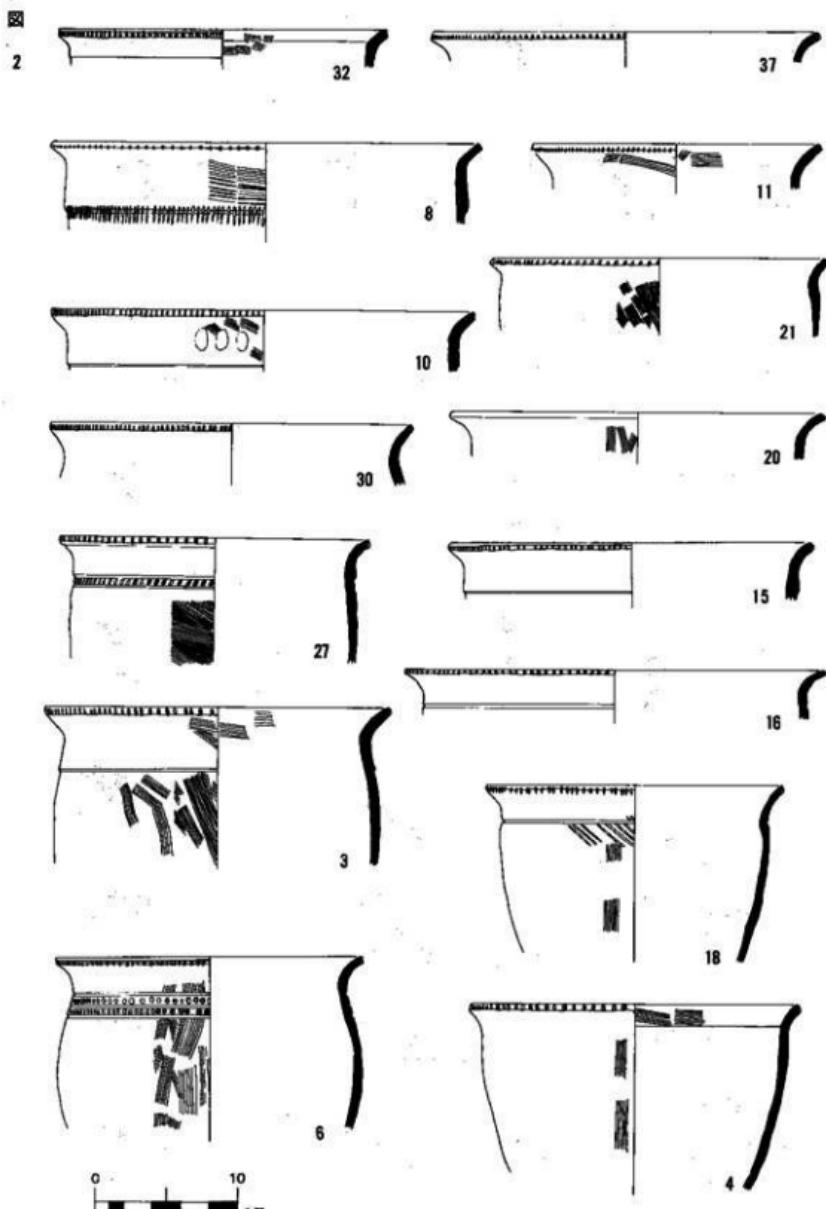
畿内において「創造的展開をはじめる」時、当地方においても時代の大きな画期を迎えるのである。  
すなわちⅢ類土器から九州的なものの否定が始まり、Ⅲ類になるとそれを試してしまる。<sup>08</sup>

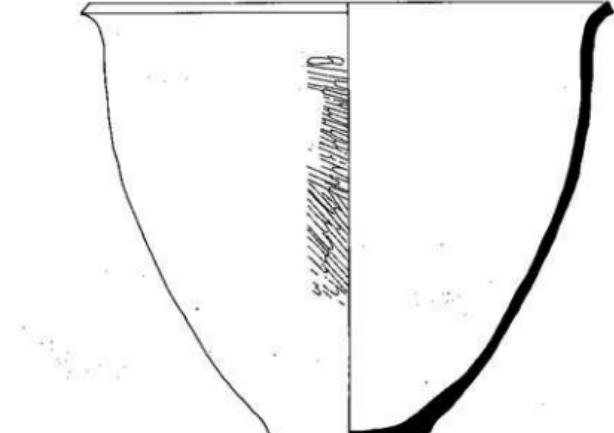
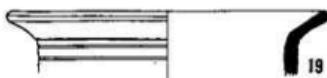
石器においては、大陸系磨製石器に伴って6点の打製石斧が出土した。縄文時代の土掘り具としての打製石斧が弥生前期社会にも引き続いて利用されていたことを示すものである。さらにSD1床面において柱状片刃石斧(20-27)とともに縄文晚期系の石刀(19-44)が出土したことは、前期社会において呪具として一定の役割を果していたという精神生活の一端を知る上で注目にあたる。このことと打製石斧の多量的存在、高杯形土器の皆無に近い程の在り方等は相関関係にあるものと考えられ、当地方における弥生時代前期社会の1つの事象及び発展段階を示す諸側面と理解することは可能であろう。

#### 註

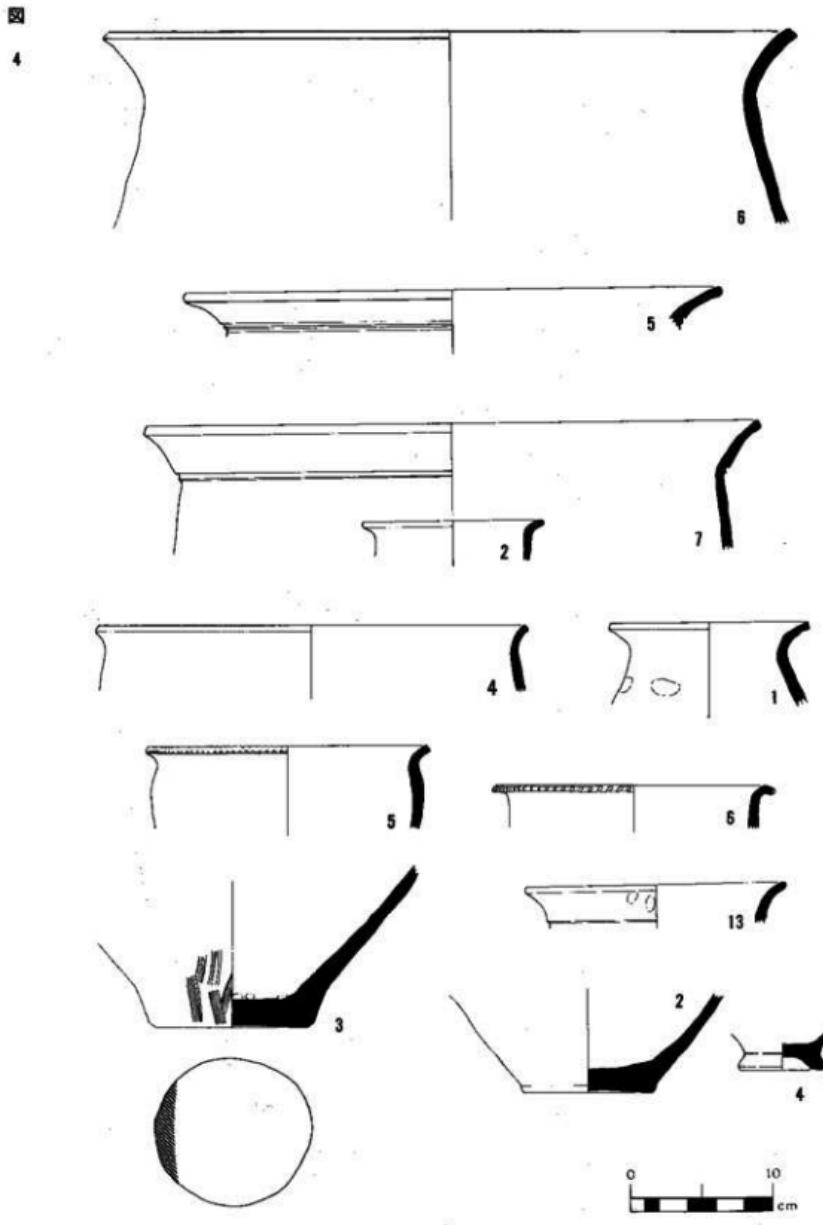
- 03 藤田憲司 「中部瀬戸内前期弥生土器の様相」 『倉敷考古館研究集報』17号 1982年
- 04 岡本健児 「土佐考古学の諸問題」 『高知の研究』 1地質考古篇 1983年
- 05 『東奈良遺跡』 東奈良遺跡調査会 1981年
- 06 岡本健児氏の御教示による。
- 07 井藤曉子 「入門講座 弥生土器—近畿2—」 『考古学ジャーナル』 №202 1982年
- 08 田辺昭三・佐原・真 「弥生文化の発展と地域性—近畿—」 『日本の考古学』Ⅲ 1966年







0 10 cm



5

58

24

42

16

18

29

3

44

46

40



6



50



15



34



36



38



1



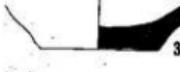
45



25



20



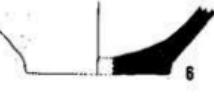
37



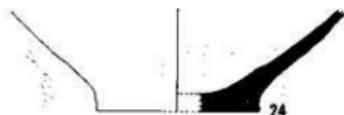
26



33



6



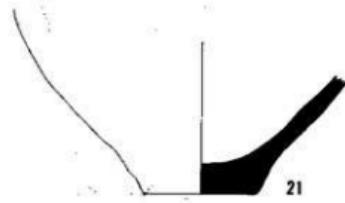
24



5



2



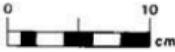
21



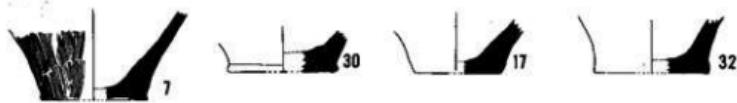
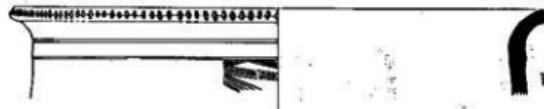
39



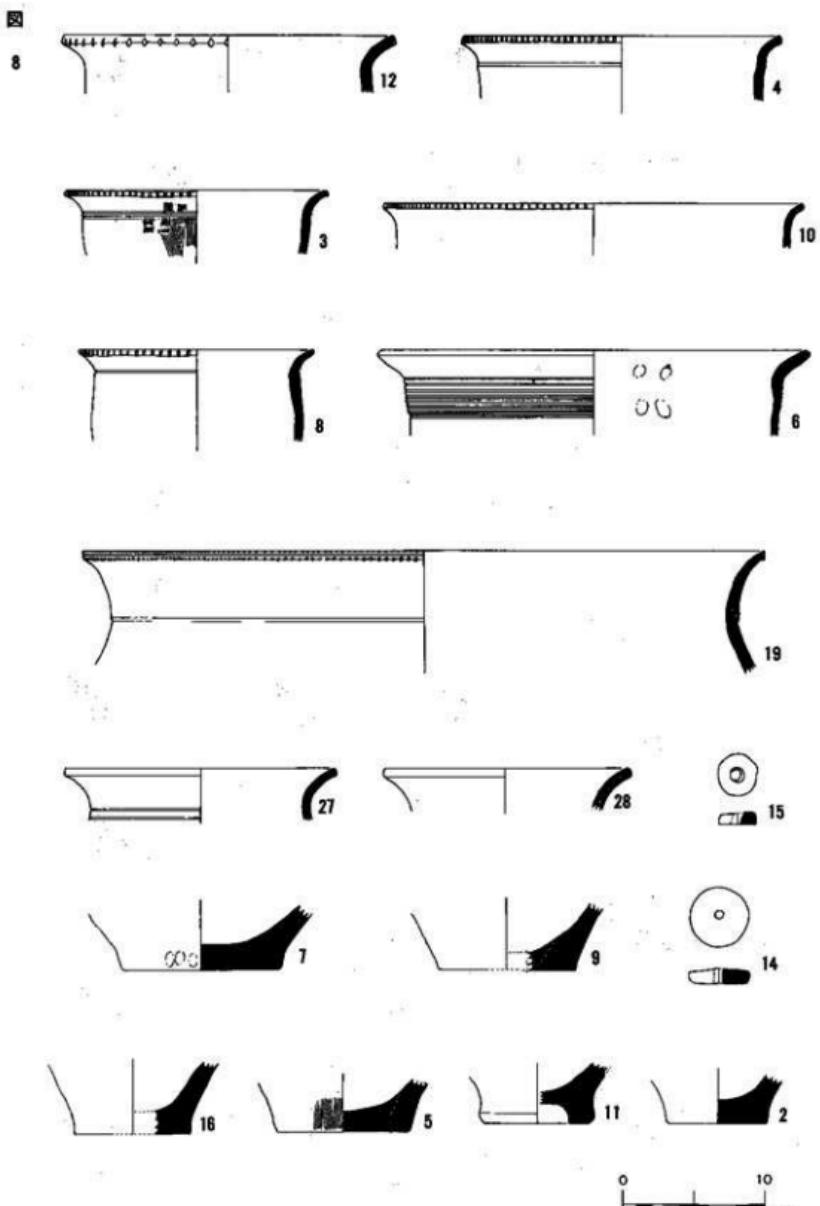
57

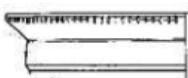
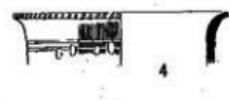
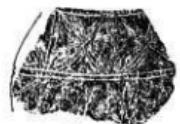


— 38 —

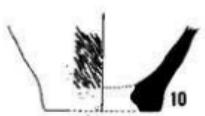


0 10 cm

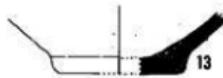




25



10



13



16



24

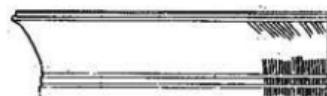
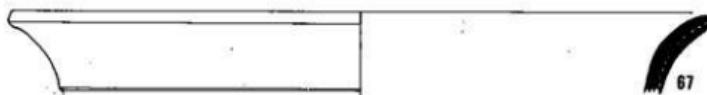
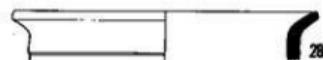
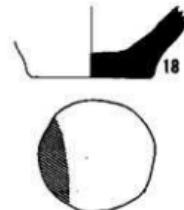
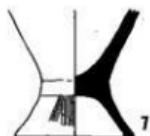


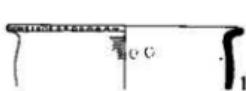
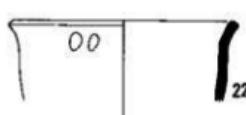
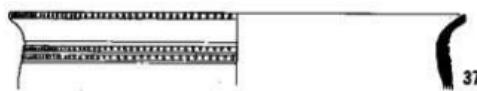
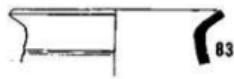
22



□

10





■

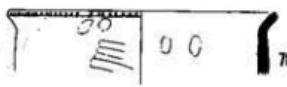
12



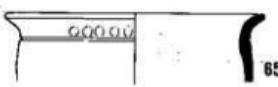
64



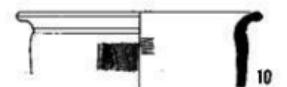
82



78



65



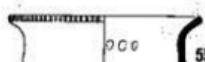
10



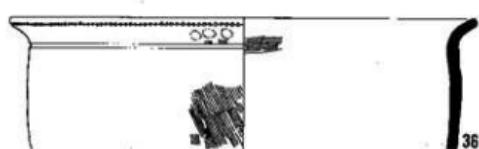
2



62



55



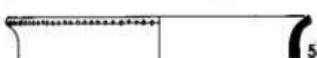
36



46



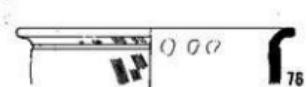
12



54



68

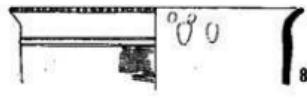
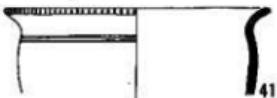
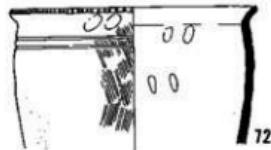
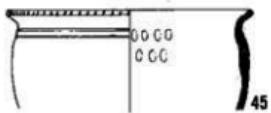
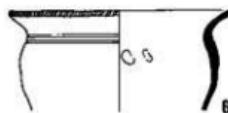
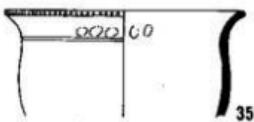
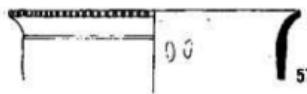


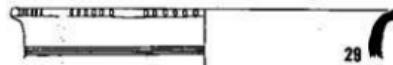
76



69



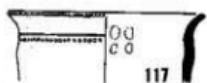




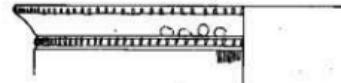
29



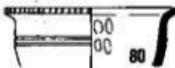
52



117



14



80



8



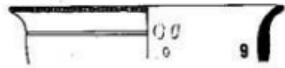
26



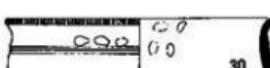
90



66



9



30



25



48



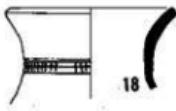
17



122



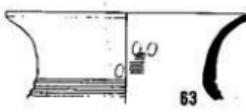
3



18



20



63

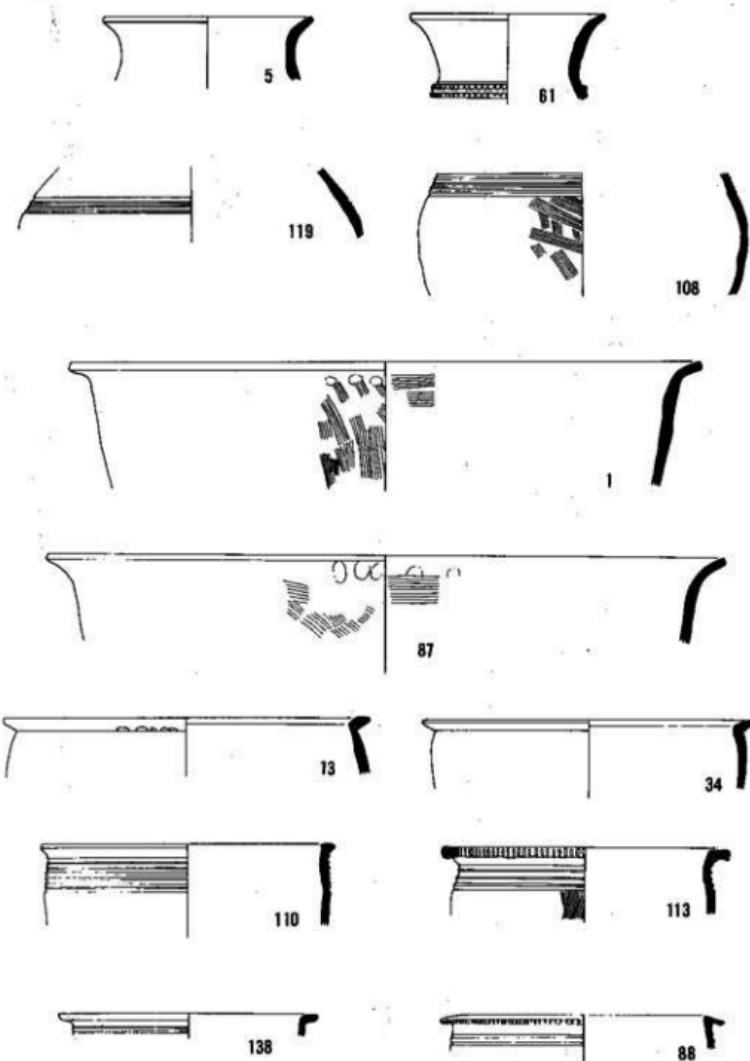


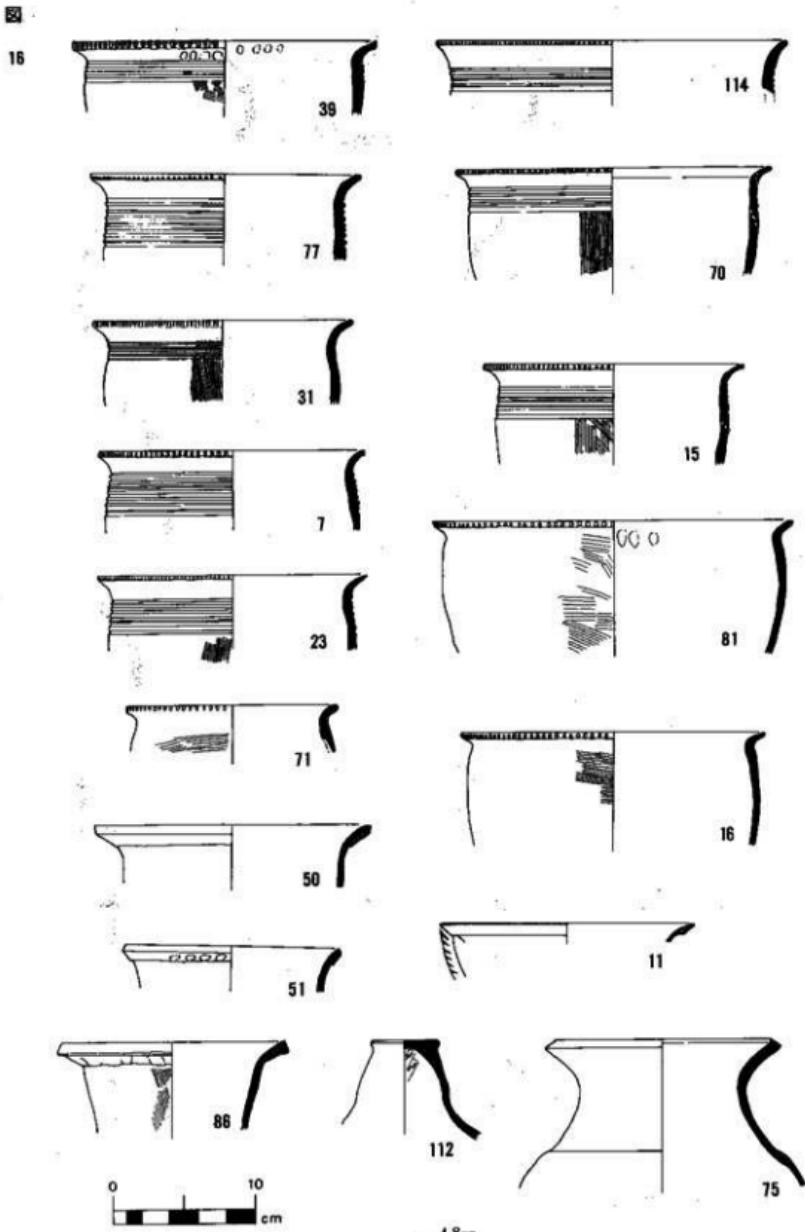
116

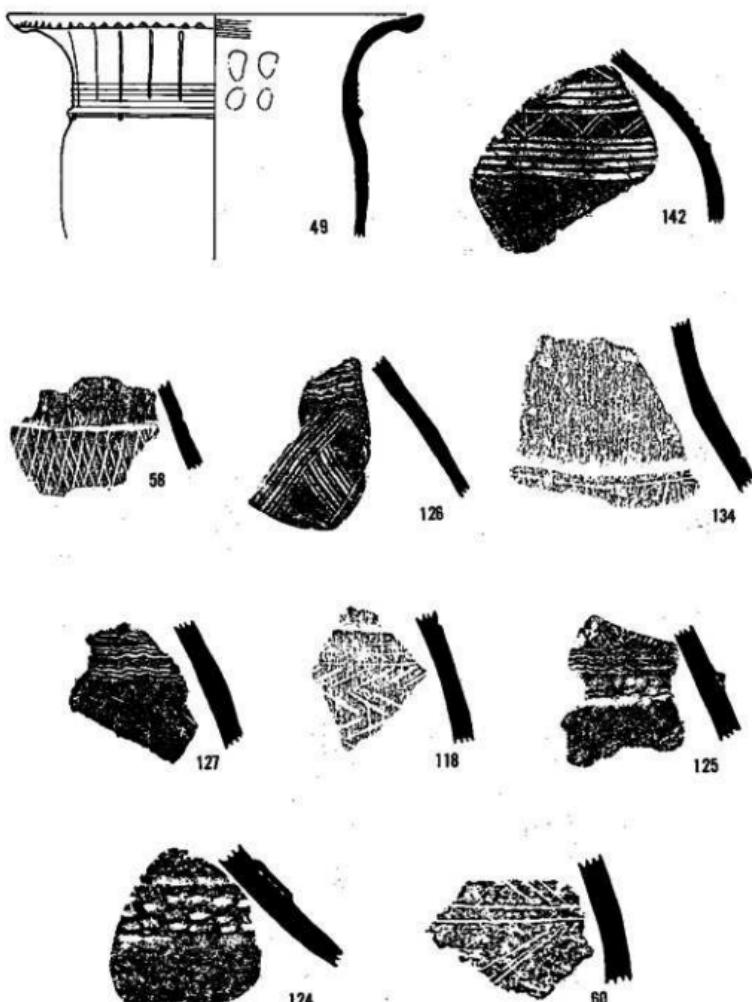


4











39

41



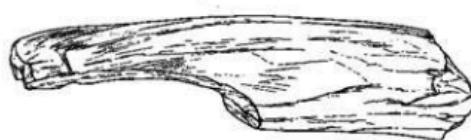
40

42



43

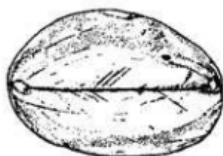




44



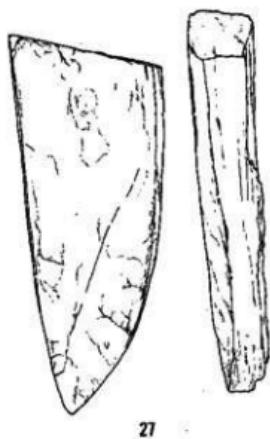
16



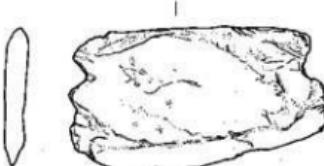
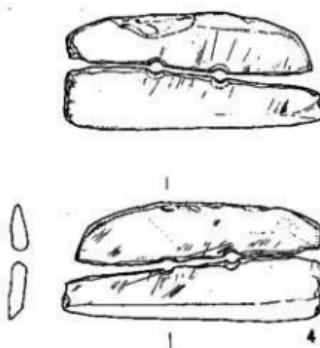
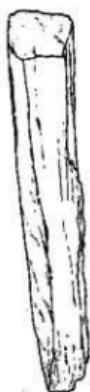
-51-

图

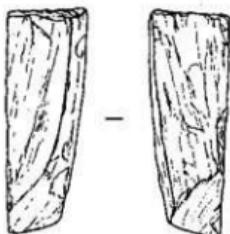
20



27

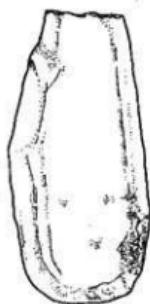


19

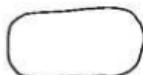


29





18



3



5



9





28



8



34



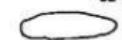
6

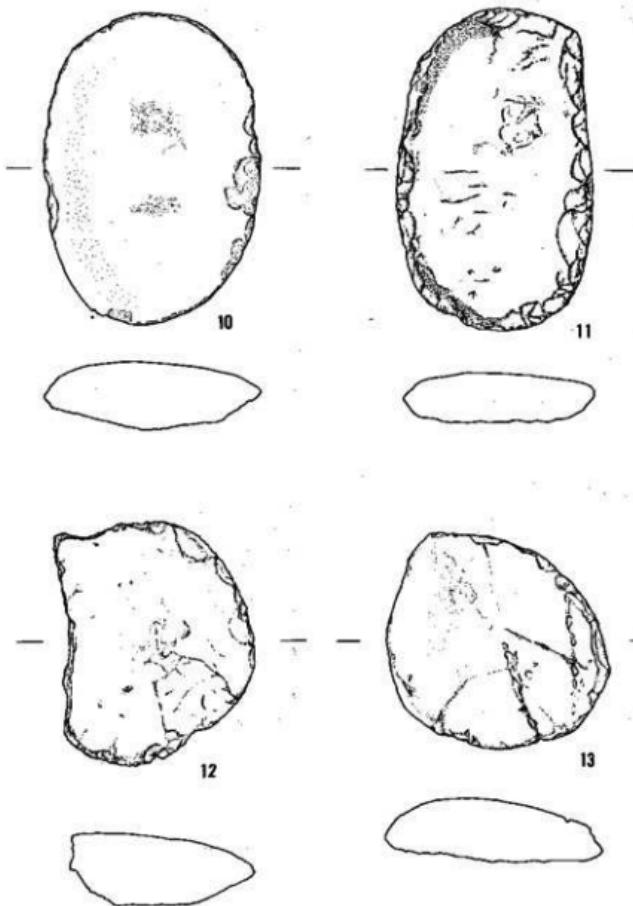


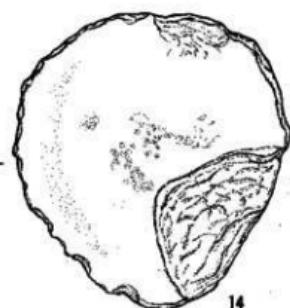
32



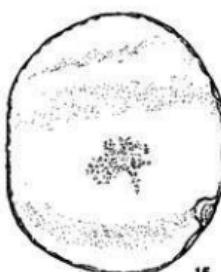
7



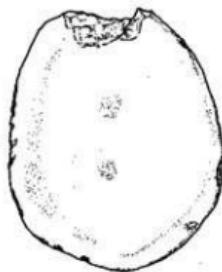




14



15

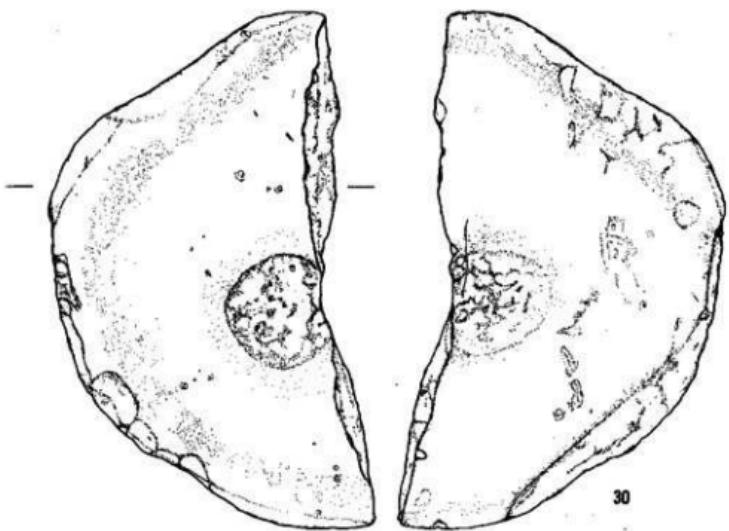


17

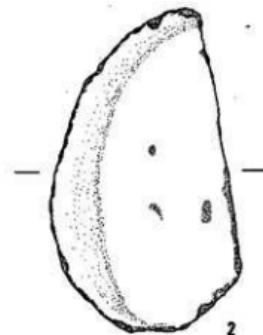
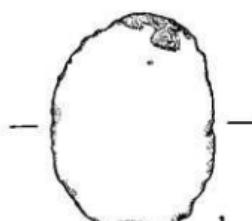


20



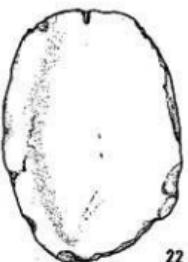


30

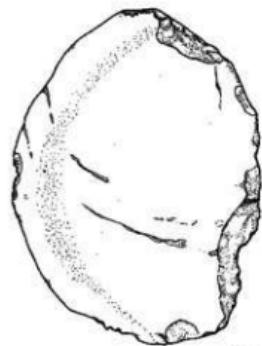
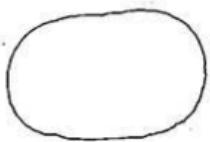




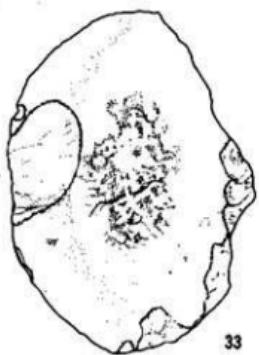
36



22

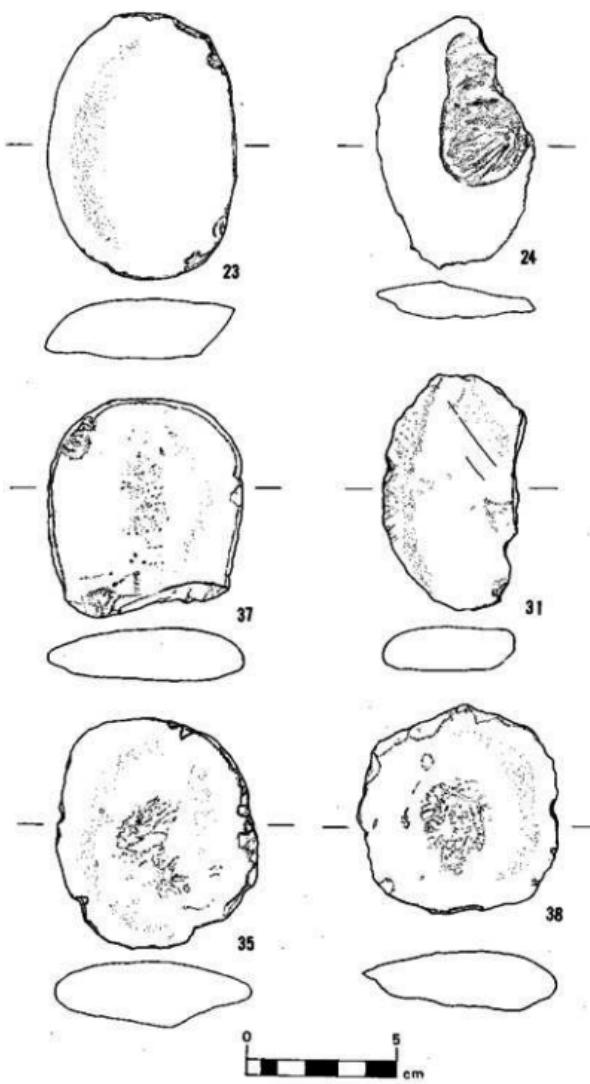


21



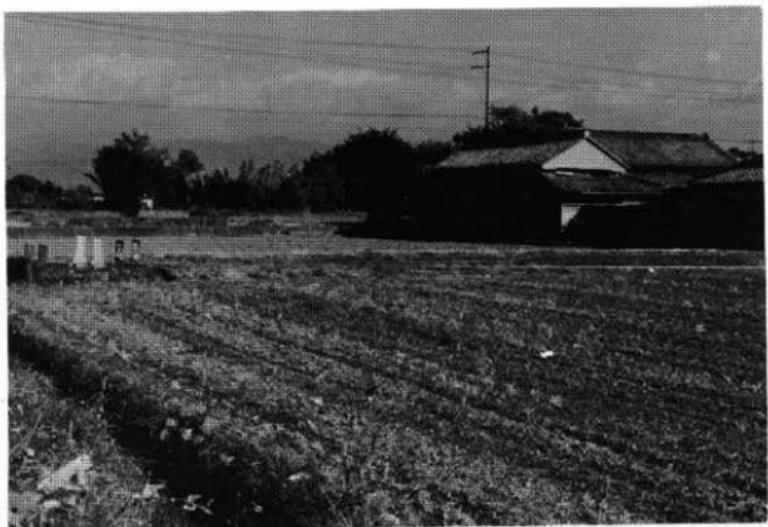
33







# 図版



A地区 全景 南から



A・B地区 西から



D地区 全景 南から



A地区 遺構完掘状況



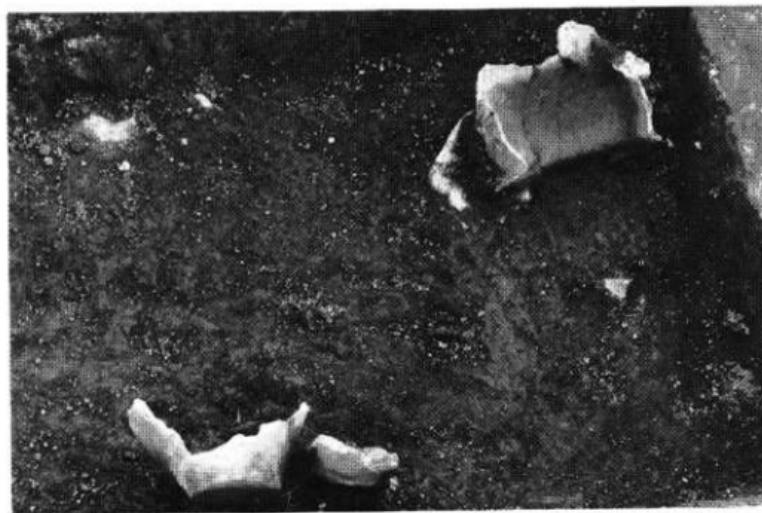
A地区 SK2及びSD2 東から



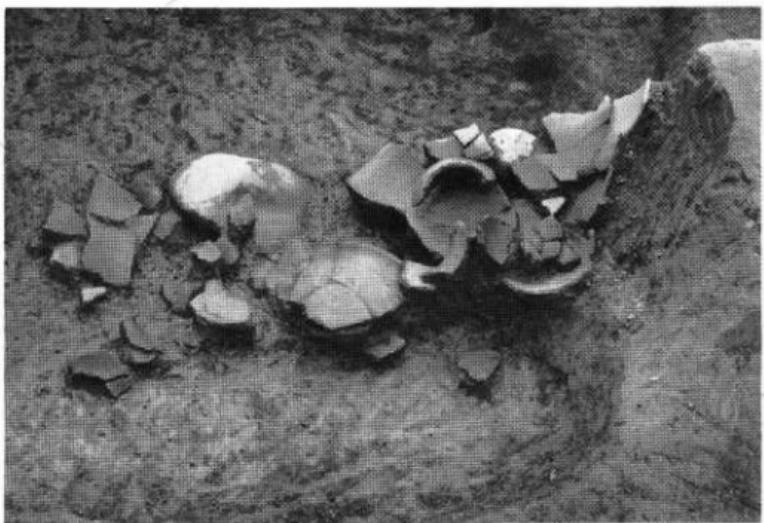
A地区 SK2及びSD2 西から



A地区 SDI 西から



SDI 土器出土状況



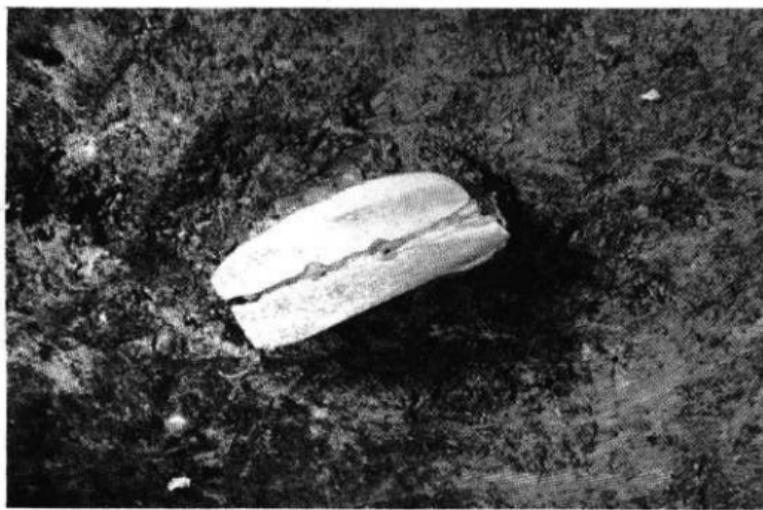
S K I 土器出土状况



S D I 土器出土状况



S D I 床面 石刀出土状况



D区 石庖丁 出土状况



3-2

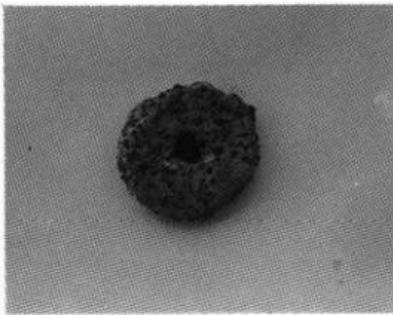


14-25

上、SK I 出土の變形土器・D 地区出土の壺形土器



A・D 地区出土の粘土塊



8-15 紡錘車



16-112 D 地区出土の蓋形土器



11-111 D 地区出土の蓋形土器



14-18 D 地区出土の蓋形土器



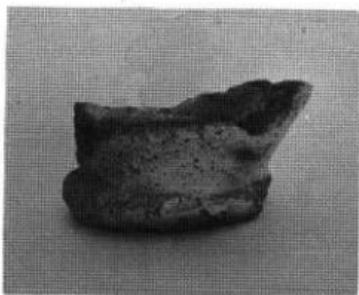
16-75 D 地区出土の蓋形土器



4-2(初痕)



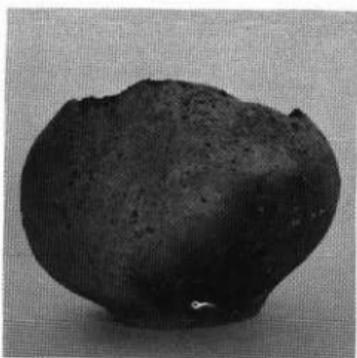
9-17



10-9



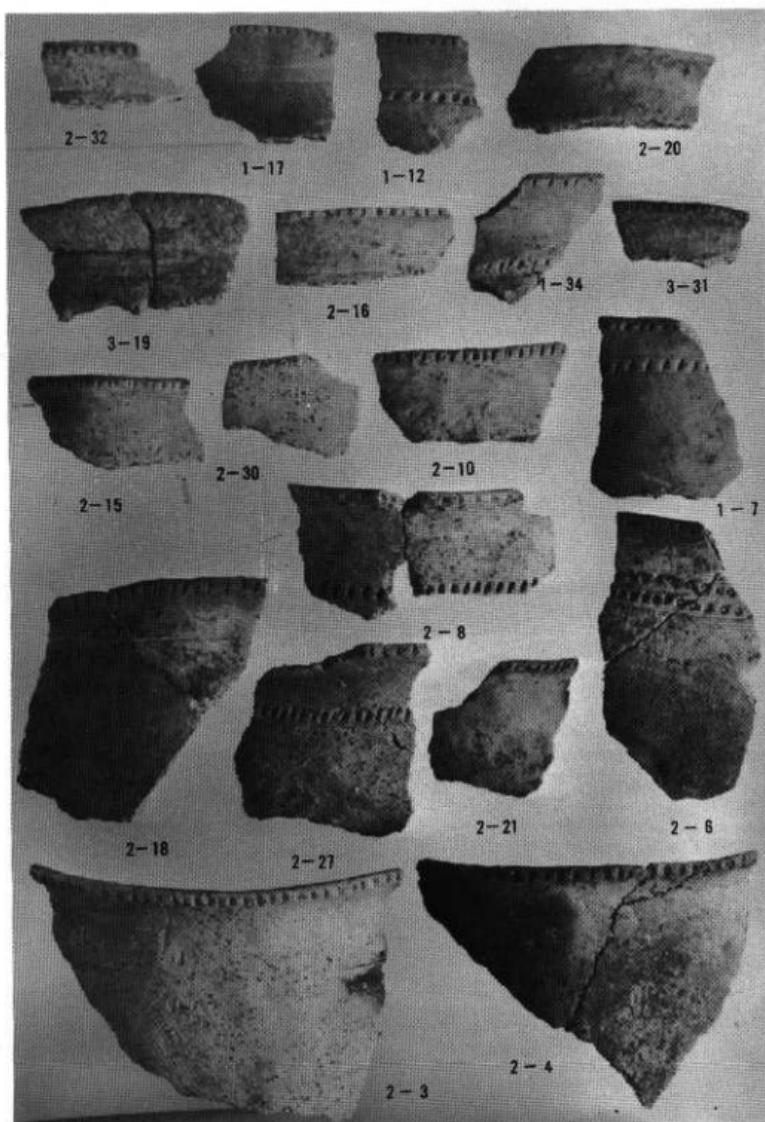
4-4



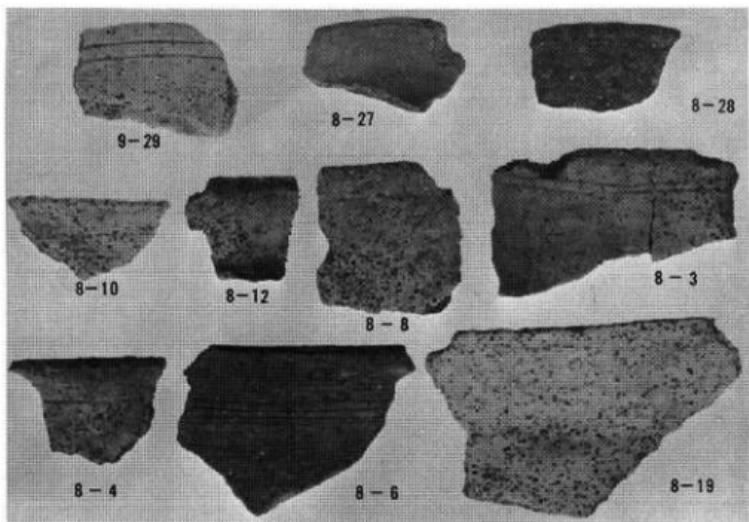
6-25



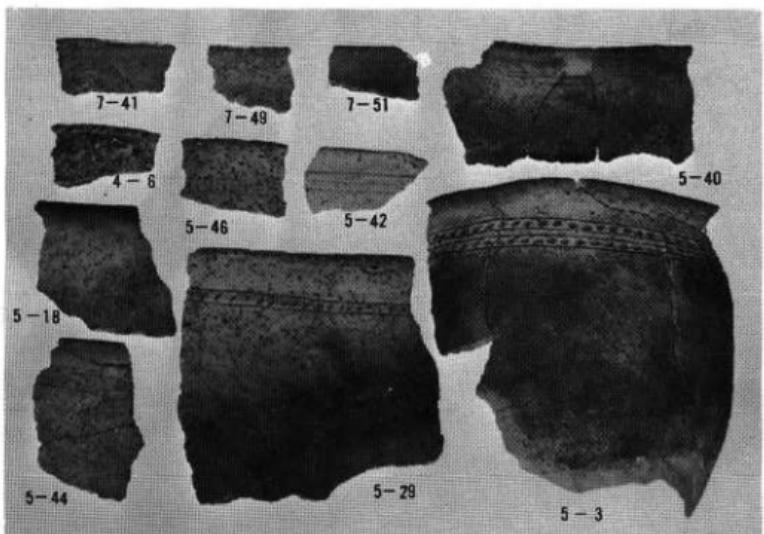
10-7



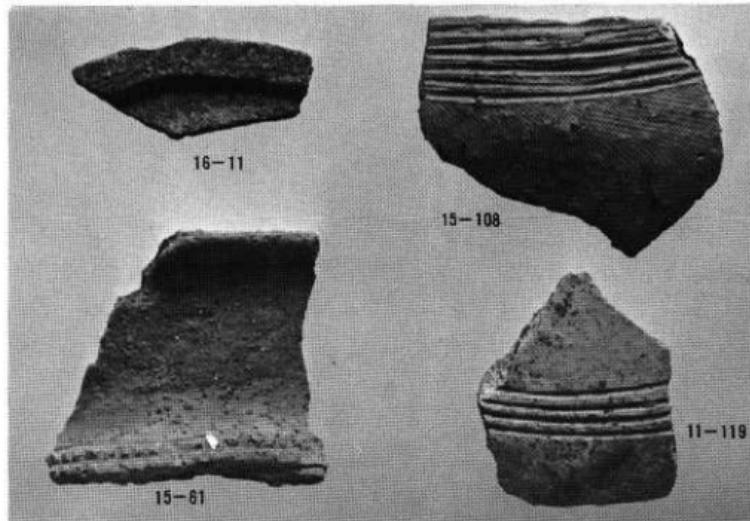
A地区 SK I 出土の変形土器



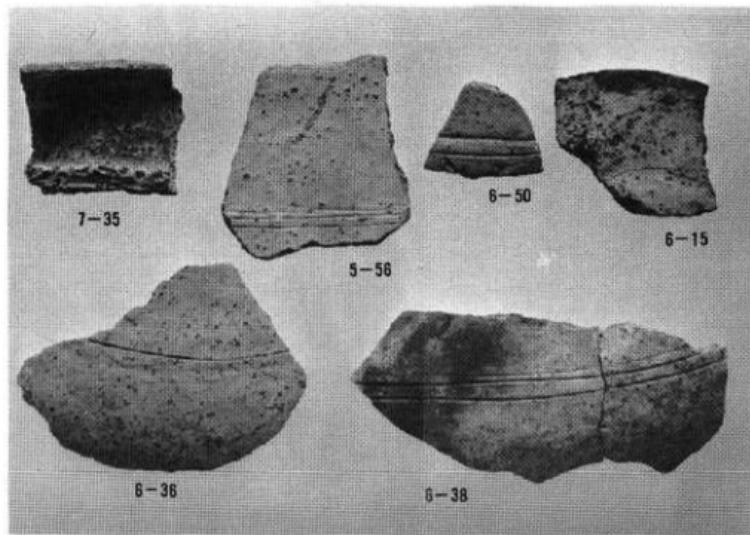
A地区 包含層及び擾乱層出土の土器



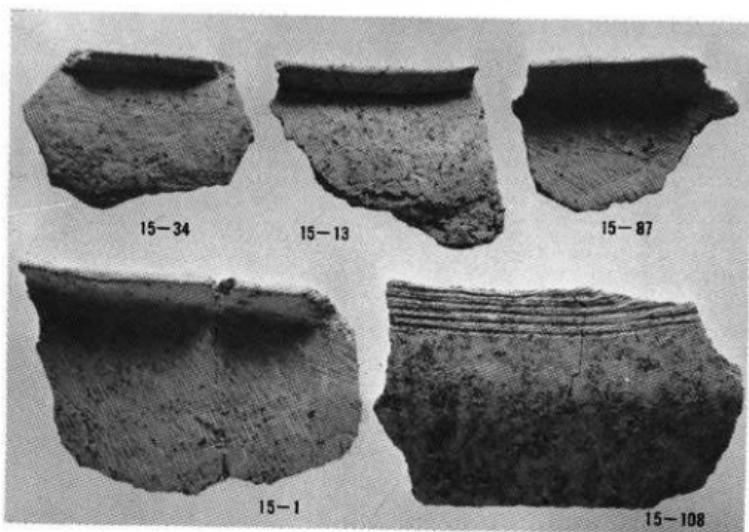
A地区 S D I 出土の変形土器



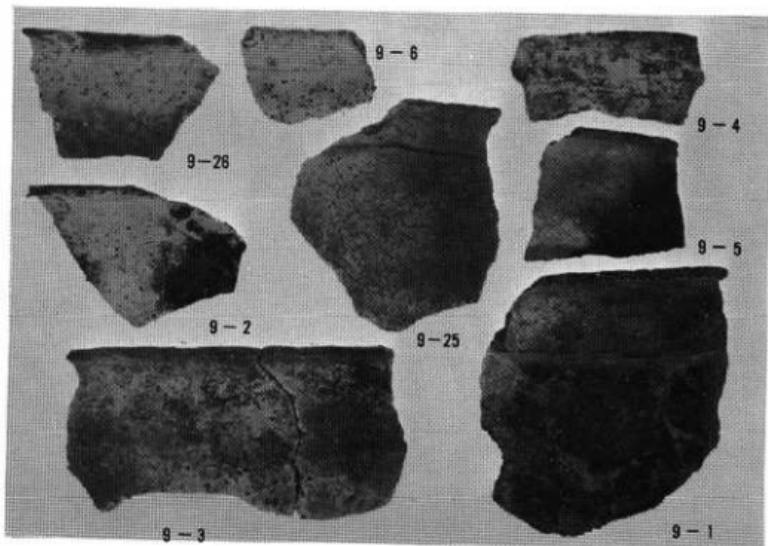
D地区出土の壺・壺形土器



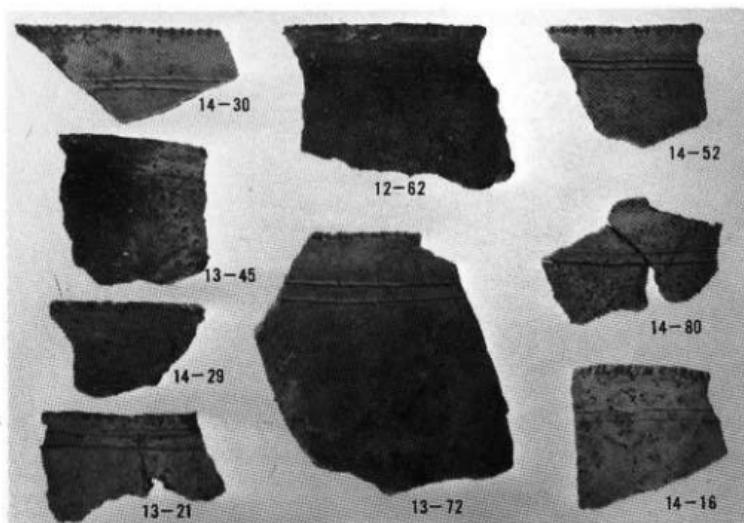
A地区 SD 1出土の壺形土器



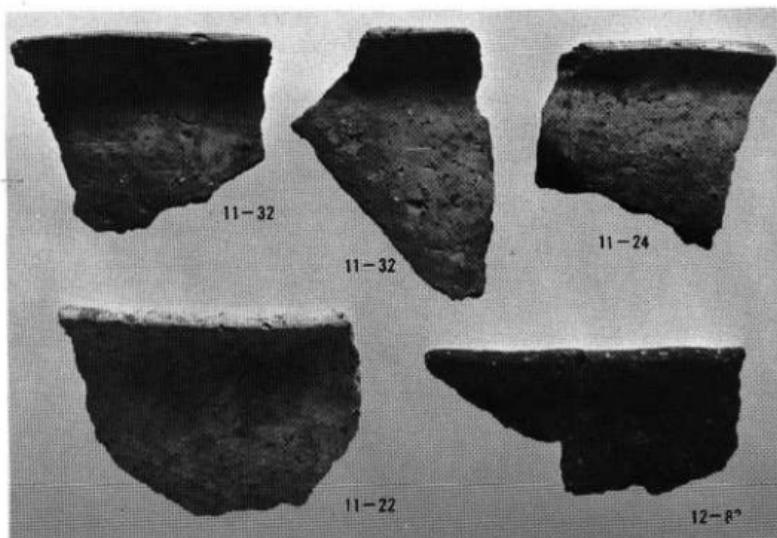
D 地区出土の鉢形土器・壺形土器



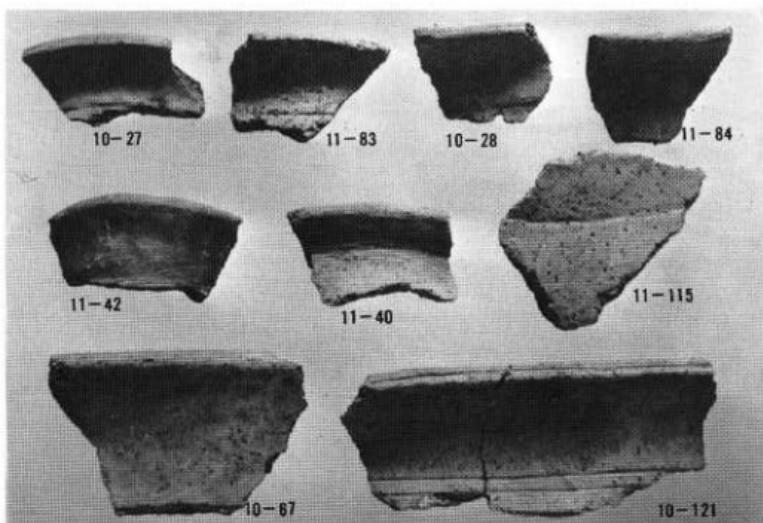
A 地区攤乱層出土の土器



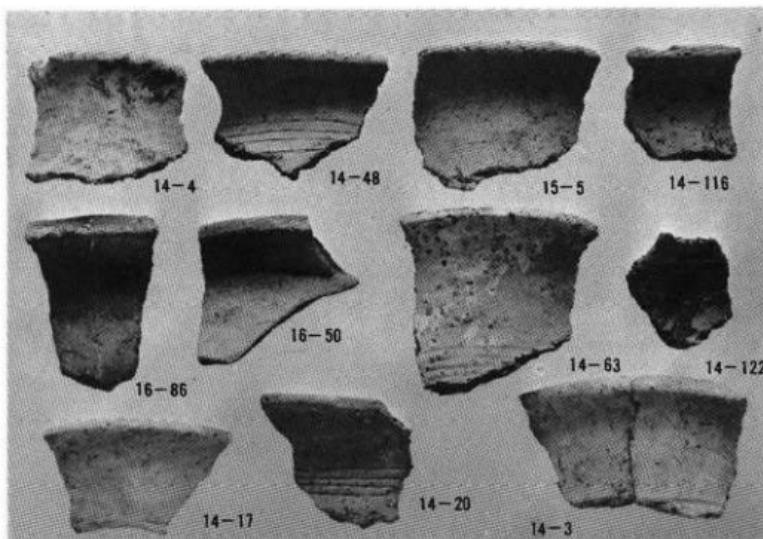
D 地区 出土の変形土器



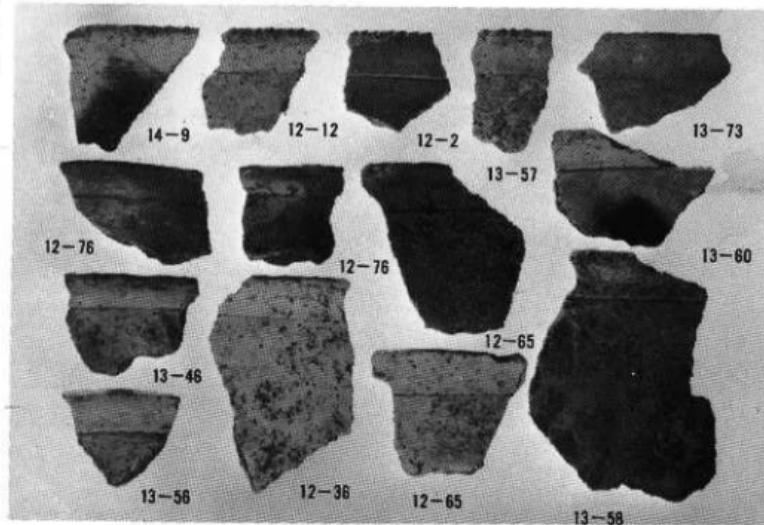
D 地区 出土の変形土器



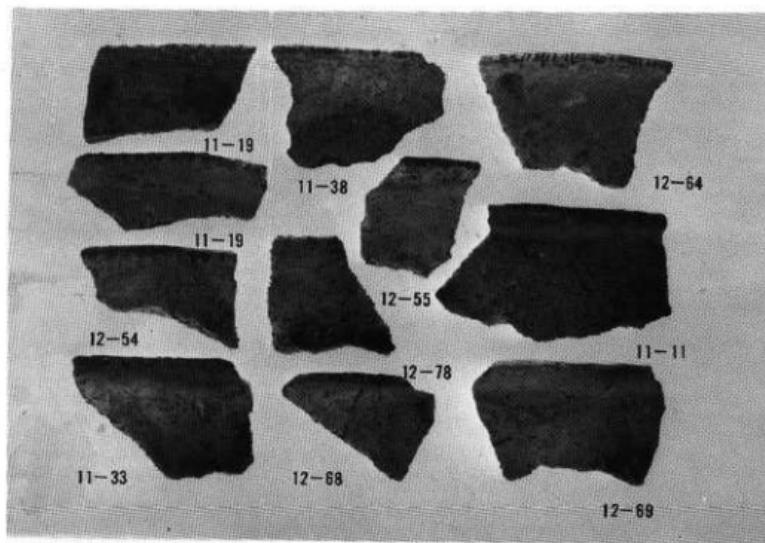
D地区 出土の壺形土器口縁部



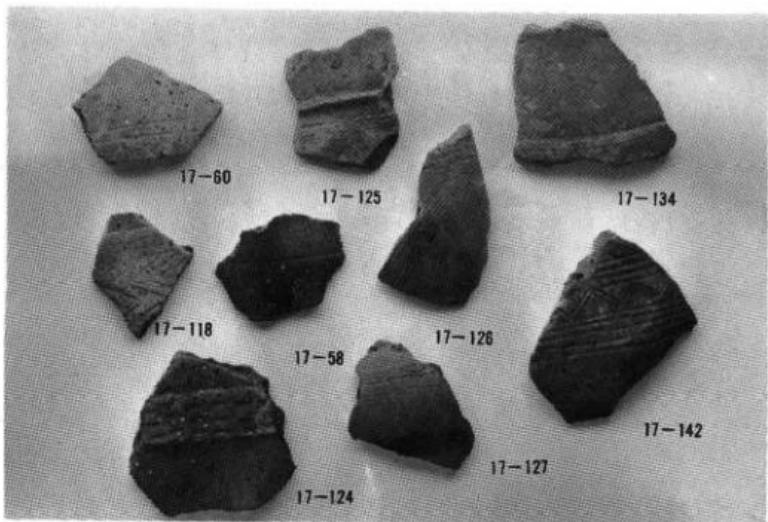
D地区 出土の壺形土器口縁部



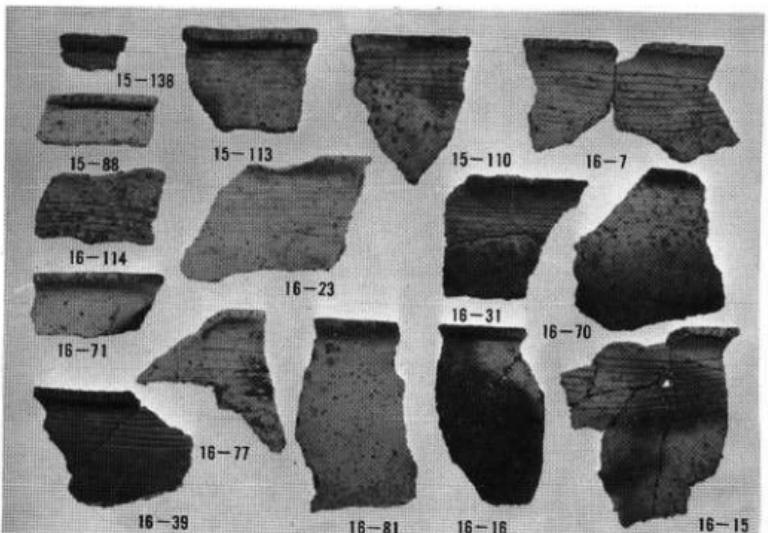
D 地区出土の變形土器



D 地区出土の變形土器



A・D地区出土の臺形土器胴部破片



D地区出土の臺形土器